

平成 29 年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」

保護者に対する調査の結果と学力等との関係の
専門的な分析に関する調査研究

国立大学法人お茶の水女子大学

平成 30 年 3 月 30 日

目次

序章 調査研究の概要	1
------------	---

【第1部】統計分析

(家庭環境と学力)

第1章 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度構成	10
第2章 家庭環境と子供の学力	13
第3章 家庭の社会経済的背景・「非認知スキル」・子供の学力	23
第4章 小学生の学力と家庭の文化的環境	28
第5章 学力格差の変動—平成25年度と平成29年度の比較分析—	34

(家庭背景による学力格差の克服：レジリエンス)

第6章 大都市において経済的不利を克服している家庭の特徴	40
第7章 不利な環境を克服している児童生徒の特徴	45

(社会経済的背景・学校・学力)

第8章 学校内での社会経済的背景の分散と学力	62
第9章 学校SESと学力の関連：都市規模による差異	73
第10章 「教育効果の高い学校」の特徴の地域差	84
第11章 学校の地域特性と社会経済的背景	99
第12章 継続的に学力の高い学校の風土は「良い」のか？	106

【第2部】事例分析

第13章 継続的に成果をあげている学校の抽出	115
第14章 高い成果を上げている学校 —事例研究—	129
第15章 成果を上げつつある学校 —事例研究—	148
第16章 高い成果を上げている学校・教育委員会の訪問レポート	155

【第3部】補論及び集計表

第17章 保護者調査のウェイト作成	191
第18章 保護者調査集計表	210

序章 調査研究の概要

浜野 隆

(1) はじめに

本研究は、平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果及び保護者に対する調査（及び、過年度の調査）をもとに、家庭状況等が児童生徒の学力等とどのように関係しているのかを分析したものである。保護者に対する調査は平成 25 年度以来 2 度目である。本事業においては、貸与されたローデータへのウェイトづけをしたうえで、具体的にどのような要因が児童生徒の学力等と関係が強いのか、家庭における諸要因のうちどの項目が学力等と深い関係にあるのか、また、それらの関係は家庭の経済状況等を統制しても有意な関係は残るのか、学力格差（家庭の社会経済的背景による学力差）はどのように変動しているのか、経済面等で困難を抱えながらもそれを克服している家庭はどのような特徴があるのか、について検討した。

家庭の社会経済的背景による学力差の現状については、学校間の差、学校内の差という観点からも分析した。また、家庭の社会経済的背景や学校環境等を統制した上で、学力に影響を与える児童生徒の特徴や学校・家庭・地域の取組（学習指導、研修、学力調査の活用、家庭学習指導、地域人材の活用等）を分析した。

事例分析としては、学校がおかれている社会経済的背景から推計される学力を継続的に大きく上回っている学校（高い成果を上げている学校）を 10 校（小学校 5 校、中学校 5 校）抽出し、そのような学校・教育委員会の特徴や取組について調査し、現場での取組を分析した。また、それに加え、成果という点でかつては課題を抱えていたが、近年になって成果が上がりつつある学校（1 校）の事例も分析した。

(2) 平成 29 年度保護者調査の概要

①調査対象と回収状況

保護者調査の対象は、無作為に抽出された、公立学校における本体調査を受けた児童生徒の保護者である。対象数と回収状況は次の表の通りである。

	保護者			学校		
	対象数	有効回収数	回収率(%)	対象数	有効回収数	回収率(%)
小学校	60,167	55,167	91.7	1,186	1,153	97.2
中学校	77,491	67,309	86.9	799	692	86.6

②調査時期

調査は、平成 29 年 5 月に実施された。

③調査内容

調査の内容は次のような項目で構成されている：家庭の状況（きょうだい構成や一緒に住んでいる人、保護者の単身赴任等）、保護者の子供への接し方、子供の土曜日や放課後

の過ぎしかた、子供の教育に対する考え方、子供が通っている学校について、学校や地域との関わり、保護者の行動、家庭の蔵書数、保護者の社会経済的背景、普段の帰宅時間。

④ウェイトづけ

回収されたデータにウェイトをつけて、全国レベルでの推定を可能としている（詳細については、第17章参照）

（3）本報告書の構成

本報告書は次のような構成となっている。

【第1部】統計分析

（家庭環境と学力）

- 第1章 家庭の社会経済的背景（SES）の尺度構成
- 第2章 家庭環境と子供の学力
- 第3章 家庭の社会経済的背景・「非認知スキル」・子供の学力
- 第4章 小学生の学力と家庭の文化的環境
- 第5章 学力格差の変動—平成25年度と平成29年度の比較分析—

（家庭背景による学力格差の克服：レジリエンス）

- 第6章 大都市において経済的不利を克服している家庭の特徴
- 第7章 不利な環境を克服している児童生徒の特徴

（社会経済的背景・学校・学力）

- 第8章 学校内での社会経済的背景の分散と学力
- 第9章 学校SESと学力の関連：都市規模による差異
- 第10章 「教育効果の高い学校」の特徴の地域差
- 第11章 学校の地域特性と社会経済的背景
- 第12章 継続的に学力の高い学校の風土は「良い」のか？

【第2部】事例分析

- 第13章 継続的に成果をあげている学校の抽出
- 第14章 高い成果をあげている学校 —事例研究—
- 第15章 成果を上げつつある学校 —事例研究—
- 第16章 高い成果をあげている学校・教育委員会の訪問レポート

【第3部】補論及び集計表

- 第17章 保護者調査のウェイト作成
- 第18章 保護者調査集計表

以下、各章の記述をもとに、研究内容と方法、成果について概要を記載しておく。

（4）調査研究の内容と方法

①家庭の社会経済的背景（SES）・家庭環境と学力

本研究では、家庭の社会経済的背景（SES）の尺度構成を行った。具体的には、三つの

変数（家庭の所得，父親学歴，母親学歴）を合成し，得点化した（第1章）。

保護者調査では，家庭の社会経済的背景に関しては，父親学歴，母親学歴，家庭の所得，父親職業，母親職業に関する五つの質問項目が含まれている。一般的には，社会経済的背景（SES）は，職業，学歴，所得の三つの要素から構成されるものとされてきたが，今回の調査の父親職業，母親職業に関しては，職業の中味よりも職業の形態（例えば「常勤職員」，「非常勤職員」，「自営業・家業手伝い」等）をたずねているため，職業威信スコアのように一定の序列を設定することが困難と判断した。よって，本研究の社会経済的背景の合成尺度には父親職業，母親職業は含めずに，家庭の所得，父親学歴，母親学歴のみを合算した。その合算したスコアを4等分して，第1四分位をLowest SES，第2四分位をLower middle SES，第3四分位をUpper middle SES，第4四分位をHighest SESと名づけた。

第2章では，上記のように算出したSESと学力との関係を見た。また，平成29年度保護者をもとに，家庭環境（保護者の行動や意識も含む），家庭の蔵書数や保護者の帰宅時間等（平成29年度新設項目）と子供の学力の関係を分析した。第3章では，①家庭の社会経済的背景（SES），②「非認知スキル」，③子供の学力がそれぞれどのように関連するのかを検討した。そして，第4章では特に，小学校における家庭の文化的環境と学力との関係を詳細に検討している。

また，平成25年度の保護者調査と平成29年度の保護者調査の結果をもとに，25年度から29年度にかけて家庭の社会経済的背景による学力差（学力格差）がどのように変動したのかを，回帰分析とクロス集計によって検討した（第5章）。

なお，社会経済的背景に関しては，学校の社会経済的背景の指標として，学校が所在する地域の情報を利用可能かどうか，また，各校の平均的な学力の予測において，学校の地域特性がどの程度有効かも検討した（第11章）。

②家庭の経済的困難等を克服している児童生徒の特徴

家庭の経済状況と子供の学力との間には極めて強い相関がある。しかしながら，家庭の経済的不利がありながらも高い学力を達成している子供は一定数存在する。

本研究では，家庭の経済状況と子供の学力の関係が特に強い都市部において，経済的不利にあっても，子供が高い学力を達成している家庭は，どのような特徴を持っているのかを検討した。家庭の所得との相関が高い「算数B」の学力について分析した。年収300万円までの世帯（大都市全体の約11%）で，高学力を達成している児童（学力層A層）の家庭がどのような特徴があるのか，親はどのような働きかけを子供にしているのかを検討した。大都市の特徴を明確にするため，大都市の傾向と全体の傾向とを比較した（第6章）。また，第7章では不利な環境を克服している児童生徒に着目している。「レジリエンス」（resilience：柔軟さ・回復力）という観点から，厳しい状況のなかでも困難の乗り越えに一定程度成功するためにはいかなる条件が必要なのかについて検討を行った（第7章）。

③学校内の社会経済的背景の分散と学力

学校内の社会経済的背景（SES）のばらつきに注目し，家庭的背景が比較的同質の集団と多様な集団とで学校別の学力平均にどのような影響があるのかについて検討した。

家庭的背景が比較的同質の集団はまとまりがあり，学校生活も落ち着いており，教えやすいという一般的なイメージがある一方，家庭的背景が多様な集団に対しては，学力も多

様であり、子供たちは教え合いを通して成長するというイメージがある。学校内の家庭的背景のばらつきは学力にどのような影響があるのか。本研究では学校内の社会経済的背景（SES）のばらつきによって、各学校の子供たちの平均学力がどのようなものであるかについて検討した（第8章）。

④学校 SES と学力の関連：都市規模による差異

家庭の社会経済的背景（SES）による学力格差の実態を把握するにあたっては、学校内格差と学校間格差を分けて考える必要がある。学校内格差とは、子供が通う学校の中において、SES の高い子供と SES の低い子供の学力にどれほどの差異があるかということである。つまり、子供自身の SES による格差である。学校間格差とは、SES の高い生徒が多く通う学校と SES の低い生徒が多く通う学校にどれほどの平均学力の差異があるかということである。日本は義務教育段階では、学校間の学力の分散や学力の学校間格差が比較的小さいとされてきたが、大都市と小規模地域（その他の市、町村部）では、学校を取り巻く環境が異なるため、一概に学校間格差が小さいと言えないことが考えられる。

具体的には、以下の三つの課題を扱った：（1）学力の学校間分散、SES による学力の学校間格差の程度は、地域規模により異なるか。（2）地域規模による学力の学校間格差の違いはどのような要因が考えられるのか。（3）地域規模による学力の学校間分散、学力の学校間格差の差異は、小学校と中学校で異なるか（第9章）。

⑤「教育効果の高い学校」の特徴の地域差

「教育効果の高い学校」（学校が置かれている社会経済的背景から推計される学力を大きく上回っている学校）の特徴が地域（都市規模）によってどのように異なるのかを検討した。学力（算数[数学]A, 算数[数学]B）を従属変数、学校 SES を独立変数とした回帰分析を都市規模別に行い、残差を算出した。そして、最も残差の値が大きいほうから 25 校（教育効果の高い学校）と、値の小さいほうから 25 校（教育効果の低い学校）を特定し、それぞれのグループ間で学校の学力向上への取組や指導方法の違いを検討した（第10章）。

⑥継続的に学力の高い学校の風土は「良い」のか？

継続的に高い学力をマークしている学校への訪問インタビュー調査を行うと、しばしば「その学校には勉強を頑張る風土がある」等のように聞き取れることがある。また、各学校の取組の個別的事例を概観しても、児童生徒の学習意欲向上やいじめ防止等の風土作りを醸成する試みが散見される。こうした教師の経験則による「学校風土が学力を高める」という仮説は、実証的に検証されるのだろうかを検討した。

具体的には、学校風土に着目し、学力の規定要因を分析した。本分析においてとりわけ特徴的なのは、平成 25 年度から平成 29 年度までの 5 年分の学校を継続的に調査したパネル・データを分析するという点である。パネル・データの分析から、継続的に高い学力をマークする学校の特徴を浮かび上がらせた（第12章）。

⑦継続的に高い成果を上げている学校：事例研究

平成 25 年度から 29 年度までの 5 年分の学校レベルで、学力を従属変数、社会経済的背景（29 年度データを 25 年～28 年にも適用）を独立変数とした回帰分析を行い、各年度の残差（推計式から算出される予測値と観測値の差）を算出した（小学 6 生、中学 3 年生の児童生徒数が 24 人以下の学校は回帰分析の対象から除外した）。残差とは、児童生徒の社会経済的背景から推定される点数（正答率）と、その児童生徒の実際の点数（正答率）がどれほど乖離しているのかを表す値（プラスであれば推定より高い点数、マイナスであれ

ば推定より低い点数)である。こうした算出された残差が5年間で安定的に大きい学校を「継続的に高い成果をあげている学校」と判断した。「継続的に高い成果をあげている学校」のリストからさらに、さらに、対象学年の学級数が2学級以上(特別支援学級は除く)となっている学校に絞ったうえで、学校SES、通塾率、地域バランス等を考慮して、小学校5校、中学校5校を選んだ(第15章)。これらの学校及び所管の教育委員会を対象に訪問調査を行い、学校・行政等の取組について検討した(第14章、第16章)。

⑧成果を上げつつある学校：事例研究

上記⑦の回帰分析で、残差かつては大きなマイナスであった(成果という点でかつては課題を抱えていた)が、近年になって成果が上がりつつある学校の事例も分析した。対象は1校であり、ヒアリングとドキュメント分析を用いたモノグラフを記述した。統計的リアリティを追求し一般化を志向するのではなく、全体関連的にこの学校でのできごとのリアリティを描くことを重視した(第15章)。

(5) 調査研究の成果の概要

①家庭の社会経済的背景(SES)・家庭環境と学力

小6、中3とも、また、いずれの教科、問題においても概ね世帯収入が高いほど子供の学力が高い傾向が見られる。ただその関係は必ずしも収入が多ければ多いほど子供の学力が高くなるという直線的な関係ではない。保護者の最終学歴については、学歴が高いほど子供の学力が高い傾向が見られる。そのため、SESが高いほど子供の学力は高い。Highest SESとLowest SESとの間には最大で正答率24.2ポイントの差(数学A)がある。

ここでもう一つ注目しておきたいのが、SES別に見た「学力のばらつき」である。SES別に、標準偏差と変動係数をみると、Highest SESが最もばらつきが小さく、Lowest SESが最もばらつきが大きい。Lowest SESにおいて学力のばらつきが大きいということは、低いSESという「環境」に学力が決定されるのではなく、不利な環境を克服し、高い学力を達成している児童生徒も一定数存在することを示唆している。

保護者の子供への働きかけについては、次のような家庭で子供の学力が高い傾向がある：「テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間等のルールを決めている」「子供と何のために勉強するかについて話している」「子供に努力することの大切さを伝えている」「子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている」「子供から、学校での出来事や友達のことについて話をする」「保護者から、お子さんの学校での出来事や友達のことについて話をする」「子供から、勉強や成績のことについて話をする」「保護者から、勉強や成績のことについて話をする」「子供から、将来や進路についての話をする」「将来、子供に留学(海外学校への進学を含む)をしてほしいと思っている」「自分の考えをしっかりと伝えられるようになることを重視している」「地域や社会に貢献する等人の役に立つ人間になることを重視している」「家庭での蔵書数が多い」「家庭にある子供向けの本の数が多い」。保護者の帰宅時間と子供の学力の関係については、SESを統制すると、ほとんど見られなくなる(第2章)。

小学生について見ると、第一に、学力の高い子供、特に知識の活用力が高い子供ほど、学習習慣のみならず、読書の習慣がある。第二に、学力の高い子供の家庭ほど、保護者が子供の時間の使い方をコントロールし、計画的に勉強させるだけでなく、本や新聞等の活字文化や、外国語や外国の文化に触れる機会を意識的に作ろうとする傾向がある。第三に、

「勉強や成績のこと」「将来や進路」「地域や社会の出来事やニュース」を、親からだけでなく子供からも積極的に話す関係性が、高学力層の子供の家庭の文化的特徴の一つといえる。第四に、美術館、劇場、博物館、科学館、図書館等の文化施設に子供と一緒にいく頻度はいずれの学力層でも思ったほど多くはないが、特に学力D層においては、美術館や劇場に「行ったことがない」割合が2割を超えているだけでなく、近隣で無料という意味では誰にとっても利用しやすいはずの図書館にも「ほとんど行かない」割合が35%と多い。第五に、高学力の子供の家庭では、保護者自身が本や新聞といった活字メディアを頻繁に利用する割合が高まる（第4章）。

学力のような認知能力と同様に、「非認知スキル」もその後の人生に大きな影響を与えるとされている。SES・「非認知スキル」・学力の関係について検討した（第3章）結果、次の3点が明らかになった：

- ・「非認知スキル」は子供の学力と弱い相関がある。小6の方が中3よりも学力との相関がやや強い。

- ・ただし、「非認知スキル」と家庭の社会経済的背景（SES）の間にはほとんど相関が見られない。

- ・つまり、家庭の社会経済的背景（SES）の高低にかかわらず（家庭の社会経済的背景（SES）が相対的に低い場合でも）、「非認知スキル」を高めることができれば、学力を一定程度押し上げる可能性がある（ただし、今回の分析では両者の間に弱い相関があることが確認できたにすぎないため、この可能性がどの程度確かなのかはさらなる検討を必要とする）。

平成25年度と29年度を比較して、学力格差（SESの学力への影響）がどのように変化したかについても検討した。学力層（A層～D層）別にSES構成比の変化を見ると、小学校国語Aについていえば、学力A層に占めるLowestの増加とHighestの減少によって特徴づけられる。一方、学力D層について見ると、25年度と29年度はSES構成比に変化はほとんど見られない。小6の国語B、算数A、算数Bについては、さほど大きな変化は見られない。このように、家庭の社会経済的背景（SES）の学力への影響の変化は、小・中学校ともに教科により様々であり、全体としての傾向を明確に読み取ることは難しい（第5章）。

なお、各校の地域特性とSESの関係については、小学校・中学校ともに大学卒業者割合とSES平均の間に強い関連があることが明らかになった。学力との関係については、小学校・中学校ともに、大学卒業者割合よりもSES平均のほうが平均正答率との相関は高かった（第11章）。

②家庭の経済的困難等を克服している児童生徒の特徴

大都市で経済的困難等を克服している家庭の特徴として次のような点があげられる：「毎日子供に朝食を食べさせている」「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている」「子供に本や新聞を読むようにすすめている」「子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている」「子供と何のために勉強するかについて話している」「美術館や劇場、博物館や科学館、図書館に行く」「蔵書数、子供向けの本の数とも、多い」、保護者が「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む（新聞は、電子新聞を含む）」「地域には、ボランティアで学校を支援する等、地域の子供たちの教育に関わってくれる人が多い

と思う」「地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がある」（第6章）。

また、不利な環境を克服し、高学力を達成している「Resilient students」（Lowest SESの学力A層）の保護者は、同じSESで学力B層以下の保護者に比べ、規則的な生活習慣を整え、文字に親しむように促す姿勢、知的な好奇心を高めているような働きかけをしている。さらに、不利な環境を克服している児童生徒の保護者は、経済的・文化的な資源が相対的に少ない状況の中で、比較的ゆとりある層にできる限り近い環境を整える姿勢が見られた。また、不利な環境を克服している児童生徒は次のような傾向がみられた：①「非認知スキル」の高さ、②学力獲得に結びつく活動（勉強や読書等）を優先する生活スタイル、③復習中心の学習スタイル、④自由時間における映像メディア／パーソナルメディアへの接触と過度な利用を統制する姿勢（第7章）。

③学校内の社会経済的背景の分散と学力

学校ごとのSES標準偏差をSES平均値で割った変動係数の大きさを比較したところ、いずれの規模の小学校・中学校でもSESのばらつきの大きな学校で平均学力が高く、また、中規模校・大規模校では第1四分位数、第2四分位数、第3四分位数の平均値が高かったことから、これらの学校において学力下位層・中位層・上位層を押し上げていることが分かった。さらに、いずれのSESの子供たちにとっても、SESのばらつきの大きい学校に所属している方が、平均学力が概ね高い傾向にあった。ただし、Lowest SESでは科目と学校規模によって、Lower middle SESではとくに小規模校において、SESのばらつきの小さい学校の平均学力が高い傾向にあった（第8章）。

④学校SESと学力の関連：都市規模による差異

学校SESと学力の関連については、次の点が明らかになった、（1）小6では、学校ごとの学力の違い、SESによる学力の学校間格差は、いずれも大都市で最も大きく、その他の市や町村では比較的小さい。（2）学校外教育費や学校外学習時間に関しても、大都市ではSESによる学校間格差が特に大きい。（3）中3では、SESによる学力・学校外教育費・学校外学習時間の学校間格差は、小学校同様に大都市・中核市で大きい、小規模地域との差異は小学校に比べて小さい。

大都市では、学校ごとの学力の違いが大きく、これはその学校にどのようなSESの子供が通うかにより強く規定されている。一方、小規模地域では学校ごとの学力の違いは学校平均SES以外の要因により規定されていると解釈できる。その背後には、大都市ではSESの高い学校には、高い学校外教育費を支出している保護者、学習習慣が定着している子供が多く、SESの低い学校には、学校外教育費の支出が低い保護者、学習習慣が定着していない子供が多いという構造が考えられる。中3では、このような学校間格差が大都市や小規模地域でも強く、都市規模による差異は小6に比べて小さい。小学校の学力格差是正を考えるにあたっては都市規模による差異を考慮し、大都市では早期に現れるSESによる学力の学校間格差、またその背後にある学校外教育費や学校外学習時間の学校間格差の実態を踏まえた施策が必要であることが示唆される（第9章）。

⑤「教育効果の高い学校」の特徴の地域差

第10章の分析では、「教育効果の高い学校」の特徴が地域によって異なることを明らかにした。教育効果の高い学校の特徴が地域によって異なるということは、ある地域で有効とされた実践が別の地域では必ずしも有効ではないことを示唆している。たとえば、町村部の「教育効果の高い学校」で行われていることをそのまま大都市に持ち込んでも有効性

は低いことがありうる。また、逆に、大都市の「教育効果の高い学校」での実践が、その他の市・町村等では有効性が低いということもありうる。

⑥継続的に学力の高い学校の風土は「良い」のか？

平成 25 年度から 29 年度までの学校パネル・データを分析することで、以下の知見を得ることができた（いずれも小 6 と中 3 で共通）。学力と学校風土得点の関連については、学校風土得点（調査対象の児童生徒について、「熱意をもって勉強している」、「授業中の私語が少なく、落ち着いている」、「礼儀正しい」、「学級やグループでの話し合い等の活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができている」、「学級やグループでの話し合い等の活動で、相手の考えを最後まで聞くことができている」の 5 項目から構成）が高い学校ほど、学力スコアが高いことが明らかになった。また、学校風土得点の向上は、学校の社会経済的背景（SES）の高低に関わらず、学力向上にプラスに作用すること、学校 SES（第 12 章では就学援助率を代替指標として使用）と学校風土との間に関係があることも明らかになった（第 12 章）。

⑦継続的に高い成果を上げている学校：事例研究

継続的に高い成果を上げている学校（第 13 章）の特徴として、次のような点が見出された：「家庭学習習慣の定着と家庭への啓発、一人も見逃さない個別指導（例：放課後や昼休み等に個別に呼んで手厚くきめ細やかに指導）」、「若手とベテランが学び合う同僚性と学校の組織的な取組（例：面倒見の良いベテラン教師と学年を組む。初任者や若手教師の研修機会を生かして全校教師が学び合う）」、「小中一貫教育による一貫した学習の構え（例：小中で家庭学習の方法、学習ルールや授業スタイルを統一。話し合いや書く力、読書習慣・言語指導の重点を共有）」、「言語活動や学習規律の重視から、授業改革へと展開（例：子供の名前を出しながら授業研究を行う。考えを伝え合うための支援や場の工夫）」、「地域や保護者との良好な関係から、積極的な地域との連携へと展開（例：地域の一員として、防災活動に取り組む。自治体でキャリア教育を推進。地域人材リストの作成）」、「学力調査の分析・活用から、一人ひとりの学力形成へ結びつける（例：一人ひとりの子供の学習状況に着目。前年の学習定着の課題を教師で共有、授業改善に活用する）」。また、継続的に高い成果を上げている学校の教師は、年度間、世代間を通じた取組を継承する意識が高く、生徒指導と学習指導の関係性を強く意識しており、校内の子供の実態に基づいて学び合いの取組を意義づける傾向がみられた（第 14 章）。

⑧成果を上げつつある学校：事例研究

かつては SES から予測される学力水準を大きく下回っていたが、ここ数年で大きく改善し、SES から予測される学力水準にまで回復した学校を、「成果を上げつつある学校」と見なし、この条件に該当する一つの中学校を対象とした事例研究を行った。「成果という面で課題を抱えている」状況（SES から予測される学力を下回っている状況）から脱出し、成果をあげていくためには、学校として当たり前のことをできるように状況を作り出すことが重要である。とりわけ、学習指導の改善以前に、児童生徒や保護者との信頼関係の回復が不可欠である。対象校の校長らに「詰まるどころ、学校の荒れは、子供と家庭に起因していたと思いませんか」と質問したところ、「教員が問題」という答えが返ってきた。入学してくる生徒を受け入れてなんとかするのが公立学校教員の使命だという信念を持っており、よって、家庭のせいにも小学校のせいにも絶対にしていなかった。教員がやればなんとかなるという成功体験をもつことが大切であり、よって、ささやかであれ成功体験

を改革途上で得てもらう手法は有効である。本事例からは、校舎等の環境改善に行政が資源を投下したことは有効であった。教員の加配、（荒れや低迷の）原因を見極め、教員集団を動かす校長のリーダーシップ等も、教員のやる気を引き出し、改善を推進させる要因である（第 15 章）。

⑨その他

訪問調査を実施した 10 校（継続的に高い成果を上げている学校）の訪問レポート（第 16 章）、ウェイトづけの手続き（第 17 章）、保護者調査の集計表（第 18 章）も、本調査研究の成果である。

（6）執筆者一覧

本報告書の執筆者及び分担は、次の通りである。

氏名	所属・職位	執筆分担
浜野 隆	お茶の水女子大学・教授	序章，第 2 章，第 5 章，第 6 章，第 10 章，第 13 章，第 16 章
耳塚 寛明	お茶の水女子大学・教授	第 15 章，第 16 章
土屋 隆裕	横浜市立大学・教授	第 11 章，第 17 章，第 18 章
山田 哲也	一橋大学・教授	第 3 章，第 7 章
垂見 裕子	武蔵大学・教授	第 1 章，第 9 章
石井 恭子	玉川大学・教授	第 14 章，第 16 章
金子 真理子	東京学芸大学・教授	第 4 章
富士原 紀絵	お茶の水女子大学・准教授	第 14 章，第 16 章
中島 ゆり	長崎大学・准教授	第 8 章，第 16 章
中西 啓喜	早稲田大学・助教	第 12 章，第 13 章

第1章 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度構成

垂見裕子

(1) 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度構成の背景

日本における教育調査では、これまで家庭の社会経済的背景に関する正確な情報を収集できないことが多かった。なぜなら、日本における学校を通じた教育調査は保護者調査を実施することが少ない。児童生徒調査で家庭背景に関する質問を尋ねている場合は、家庭における文化的環境等の代替指標を用いることが多い。また親の学歴を尋ねている場合でも、小学生の場合は回答の信頼性が低いことが確認されている(耳塚 2008)。家庭背景による学力格差を正確に把握するためには、信頼性・妥当性の高い家庭の社会経済的背景 (SES) の指標を用いることが要となる。本調査では、保護者に直接、家庭の社会経済的背景に関する質問項目を尋ねているため、信頼性がより高い情報を収集することが可能となった。

本調査では、複数の質問項目が含まれていることから、「家庭の社会経済的背景 (SES)」の合成尺度を構成した。具体的には、三つの変数(家庭の収入、父親学歴、母親学歴)を合成し、得点化した。指標値が高いほど、児童生徒の家庭の社会経済的背景が恵まれていることを表わす。変数を合成することにより、どのようなメカニズムが学力に影響を及ぼしているのか、例えば親の学歴のような文化的資本が重要なのか、所得のような経済的要因がより重要なのかということは明らかにできない。しかし本調査で家庭の社会経済的背景を合成した理由は四点ある。第一に、家庭の社会経済的背景を総体として捉えることにより、家庭の社会経済的背景のグループ間(例えば Highest SES と Lowest SES)の比較が行えるため、解釈がより容易になる。第二に、従来の日本の学力格差に関する研究は、一つの変数(親の職業カテゴリーのみや、親の文化的資本のみ)を使用することが多かったが、二つ以上の変数を合成することにより、複合効果(二重に有利、あるいは二重に不利な場合)を捉えることができる。第三に、モデルが簡素化され、共線性の問題も軽減される。第四に、主成分分析で確認すると(図表 1-1)、三つの変数は相関が高く、例えば小6のデータでは説明された分散(59%)と α 係数(0.65)が比較的高いことから、合成することが妥当と判断した。なお近年は、米国の全国学力調査 (NAEP) や国際比較学力調査 (PISA) 等でも、合成された家庭の社会経済的背景指標として、SES (Socio-Economic Status) が最初からデータに含まれているものが多い。

図表 1-1 家庭の社会経済的背景 (SES) の主成分分析の結果 (小6)

成分	説明された分散の合計			抽出後の負荷量平方和			成分
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	
1	1.770	59.014	59.014	1.770	59.014	59.014	父親学歴
2	0.690	23.009	82.024				母親学歴
3	0.539	17.976	100.000				家庭収入

因子抽出法: 主成分分析

因子抽出法: 主成分分析

(2) 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度の構成方法

本調査では、家庭の社会経済的背景に関しては、家庭の収入、父親学歴、母親学歴、父親職業、母親職業に関する五つの質問項目が含まれている。社会学では、社会経済的背景 (SES) は、所得、学歴、職業の三つの要素から構成されるものとされてきた。しかし、本調査の父親職業、母親職業の質問項目は、職業威信スコアのような連続変数に換算することが困難であるため、本研究の社会経済的背景の合成尺度には父親職業、母親職業は含めずに、家庭の収入、父親学歴、母親学歴のみを合算した。

具体的な尺度の構成方法は以下の手順を踏んだ。家庭の収入は各回答項目の中間値を用いた (例えば、「200 万円以上～300 万円未満」は 250 万円とした)。父親学歴、母親学歴はそれぞれ、最終学歴を尋ねているため、教育年数に換算した (例えば、「大学卒」は 16 年間とした)。次に、それぞれの変数を標準化 (平均との差を標準偏差で割り、z-score を算出) した上で、三つの変数の平均値を算出した。なお、いずれかの変数が欠損の場合も、残りの変数で算出することとした¹⁾。なお、本尺度を構成するにあたっては、主成分得点を使用する方法も検討したが、三つの内一つの変数が欠損だった割合が高かったため、またそれぞれの因子負荷が比較的同程度 (例えば小学校の場合は、0.80, 0.79, 0.71) であったため、合成変数には平均値を利用した。最後に再度合成尺度を標準化しているため、児童生徒レベルの SES 尺度は平均が 0、標準偏差が 1 となっている。このように合成して作られた指標を四等分し、Highest SES, Upper middle SES, Lower middle SES, Lowest SES に分割した。それぞれのグループがどのような家庭背景の児童生徒から成るのかを比較したのが、図表 1-2、図表 1-3 である。

図表 1-2 児童の家庭の社会経済的背景 (SES) のグループ別記述統計 (小 6)

家庭の社会経済的背景 (SES)	家庭収入		父親学歴 (年数)		母親学歴 (年数)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
Lowest SES	3,806,385	1,519,141	11.46	1.45	11.66	1.26
Lower middle	5,335,503	1,918,139	12.77	1.40	13.17	1.10
Upper middle	6,752,208	2,273,901	14.36	1.69	13.84	1.20
Highest	9,722,792	2,851,907	16.07	1.16	15.11	1.24
全国平均	6,396,901	3,090,306	13.80	2.24	13.46	1.73

図表 1-3 生徒の家庭の社会経済的背景 (SES) のグループ別記述統計 (中 3)

家庭の社会経済的背景 (SES)	家庭収入		父親学歴 (年数)		母親学歴 (年数)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
Lowest SES	3,544,766	1,479,358	11.27	1.47	11.58	1.18
Lower middle	5,324,631	2,024,864	12.46	1.16	12.85	1.05
Upper middle	6,827,895	2,289,505	14.01	1.72	13.55	1.12
Highest	9,395,954	2,860,041	15.88	1.20	14.82	1.23
全国平均	6,314,228	3,058,243	13.58	2.19	13.23	1.62

<注>

1) 三つの変数（家庭の収入，父親学歴，母親学歴）の一つにでも欠損がある場合には合成尺度の値を欠損とする方法も試してみたところ，欠損値が2割弱と多くなること，かつ厳しい家庭環境にある層ほど欠損が生じることが確認されたため，いずれかの変数が欠損でも合成尺度は欠損としない方法をとった。

（参考文献）

耳塚寛明，2008，「第VII章 学力達成の構造—JELS2003とJELS2006の比較を中心に—」『JELS第11集 Aエリア Wave3 調査報告』お茶の水女子大学，pp.105-121.

第2章 家庭環境と子供の学力

浜野 隆

(1) 家庭の社会経済的背景と学力

図表2-1は「世帯収入」と子供の学力（正答率[%]）の関係を、図表2-2、図表2-3は保護者の学歴（父学歴、母学歴）と子供の学力との関係を見たものである。図表2-1からは、小6、中3とも、また、どの教科、問題においても概ね世帯収入が高いほど子供の学力が高い傾向が見られる。ただその関係は必ずしも収入が多ければ多いほど子供の学力が高くなるという直線的な関係ではなく、中3では、1500万円以上の世帯よりも1200～1500万円の世帯の方が生徒の学力が高い。

保護者の最終学歴については、学歴が高いほど子供の学力が高い傾向が見られる。例えば、数学Bについてみると、父親の最終学歴が「高等学校・高等専修学校」だと正答率が44.1%、「短期大学・高等専門学校・専門学校」で48.2%、「大学」になると56.5%となる。母親の最終学歴は「高等学校・高等専修学校」だと正答率が43.3%、「短期大学・高等専門学校・専門学校」で50.6%、「大学」になると60.0%となっている。小学校、中学校、いずれの教科・問題においても保護者の最終学歴が高いほど子供の学力が高いという関係が見て取れる。

図表2-1 「世帯収入（税込年収）」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
200万円未満	67.3	48.5	69.7	35.6	5.0	70.2	61.9	51.2	38.0	5.8
200万円～300万円	69.6	50.7	72.0	38.9	6.7	71.8	64.5	54.9	40.3	7.4
300万円～400万円	70.6	52.2	73.5	39.8	10.1	74.0	67.8	58.4	42.7	10.1
400万円～500万円	73.2	55.3	76.7	42.7	12.2	75.6	70.0	61.2	45.0	11.7
500万円～600万円	74.7	56.7	78.5	44.9	13.2	77.4	71.9	64.0	47.0	12.4
600万円～700万円	75.5	58.2	79.1	46.5	11.8	78.8	74.4	67.0	49.6	11.6
700万円～800万円	76.7	60.2	81.0	48.2	9.8	79.5	75.1	68.7	51.3	10.5
800万円～900万円	77.8	61.5	82.6	50.4	6.7	81.1	76.8	71.2	53.5	6.9
900万円～1000万円	79.0	62.4	84.2	52.1	5.5	80.5	76.4	71.2	53.5	5.7
1000万円～1200万円	80.5	65.5	85.9	56.3	6.3	82.4	78.9	74.3	56.2	6.2
1200万円～1500万円	81.4	66.6	87.1	57.1	2.9	82.8	79.6	74.4	57.5	2.8
1500万円以上	82.3	66.7	87.4	58.9	2.3	82.5	78.8	73.9	56.8	1.9
不明	74.1	56.3	77.7	45.3	7.6	75.8	70.3	62.5	46.1	7.2

図表 2-2 「父親の最終学歴」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
小学校・中学校	65.5	46.8	67.4	34.8	5.1	67.9	60.7	50.2	36.9	5.3
高等学校・高等専修学校	72.0	53.3	75.2	41.1	34.5	74.8	68.8	60.4	44.1	37.7
短期大学・高等専門学校・専門学校	74.8	57.1	78.7	45.0	15.1	77.7	72.8	65.5	48.2	14.4
大学	80.0	64.6	85.1	53.9	30.2	83.5	79.9	74.6	56.5	27.1
大学院	83.8	70.4	90.1	62.7	4.0	86.8	83.7	81.0	63.9	2.7
その他	73.0	52.9	76.9	42.7	0.2	75.1	71.4	61.6	45.2	0.2
不明	70.3	51.6	72.1	39.4	10.8	72.7	65.6	55.7	41.3	12.6

図表 2-3 「母親の最終学歴」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
小学校・中学校	62.9	43.0	64.0	31.4	3.9	65.7	57.1	45.5	33.5	3.7
高等学校・高等専修学校	71.4	52.5	74.0	40.5	34.6	73.9	67.9	59.1	43.3	40.7
短期大学・高等専門学校・専門学校	76.2	59.2	80.5	47.1	40.6	79.6	75.0	68.3	50.6	39.7
大学	81.8	67.2	87.6	58.0	16.4	85.5	82.2	77.7	60.0	11.8
大学院	82.9	70.1	89.5	63.0	0.9	86.7	83.5	80.0	63.5	0.5
その他	71.7	56.5	71.7	43.7	0.1	67.5	62.1	52.2	38.9	0.2
不明	70.6	52.6	70.6	41.1	3.4	72.9	66.3	56.6	41.7	3.4

世帯収入と保護者の学歴の合成変数である「家庭の社会経済的背景 (SES)」と子供の学力との関係を図表 2-4, 図表 2-5 に示す。ここまでの集計から明らかのように, SES が高いほど子供の学力は高い。Highest SES と Lowest SES との間には最大で正答率 24.2 ポイントの差 (数学 A) がある。

ここでもう一つ注目しておきたいのが, SES 別に見た「学力のばらつき」である。SES 別に, 標準偏差と変動係数を示した。SES によって平均値が異なるので, 変動係数で比較すると, Highest SES が最も変動係数が低く (ばらつきが小さく), Lowest SES が最も変動係数が大きい (ばらつきが大きい) ことがわかる。SES が高いほど正答率のばらつきが小さい。この傾向は, 小6, 中3 とも, いずれの教科においても同じである。Lowest SES において学力のばらつきが大きいということは, 低い SES という「環境」に学力が決定されるのではなく, 不利な環境を克服し, 高い学力を達成している児童生徒も一定数存在することを示唆している。

図表 2 - 4 家庭の社会経済的背景 (SES) と子供の学力 (小 6)

		国語 A	国語 B	算数 A	算数 B
Lowest	平均値	68.00	48.44	69.68	36.29
	標準偏差	20.34	24.69	22.78	21.65
	変動係数	0.30	0.51	0.33	0.60
Lower middle	平均値	72.69	54.45	76.21	42.29
	標準偏差	18.70	23.58	20.41	22.00
	変動係数	0.26	0.43	0.27	0.52
Upper middle	平均値	76.59	59.68	81.00	47.68
	標準偏差	17.12	22.83	18.28	22.56
	変動係数	0.22	0.38	0.23	0.47
Highest	平均値	81.99	67.36	87.58	57.69
	標準偏差	15.08	21.59	15.13	23.90
	変動係数	0.18	0.32	0.17	0.41
合計	平均値	74.79	57.44	78.58	45.94
	標準偏差	18.65	24.22	20.45	23.87
	変動係数	0.25	0.42	0.26	0.52

図表 2 - 5 家庭の社会経済的背景 (SES) と子供の学力 (中 3)

		国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
Lowest	平均値	70.43	63.14	52.84	38.78
	標準偏差	19.37	26.86	23.81	19.56
	変動係数	0.28	0.43	0.45	0.50
Lower middle	平均値	75.56	69.96	61.45	44.90
	標準偏差	17.54	24.77	22.68	20.32
	変動係数	0.23	0.35	0.37	0.45
Upper middle	平均値	78.94	74.26	67.40	49.66
	標準偏差	16.24	23.39	21.23	20.58
	変動係数	0.21	0.31	0.31	0.41
Highest	平均値	84.76	81.39	77.08	58.90
	標準偏差	13.76	20.57	18.41	20.64
	変動係数	0.16	0.25	0.24	0.35
合計	平均値	77.29	72.02	64.47	47.88
	標準偏差	17.70	24.97	23.42	21.57
	変動係数	0.23	0.35	0.36	0.45

(2) 家庭環境と子供の学力

平成 25 年度の保護者調査の分析（お茶の水女子大学 2014）では、次のような家庭環境（保護者の行動や意識も含む）にあてはまる子供の学力が高いという傾向を指摘した：「学校外教育支出が多い（＊）」、「子供が決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている（＊）」、「子供を決まった時刻に寝かせるようにしている（＊）」、「毎日子供に朝食を食べさせている（＊）」、「自分でできることは自分でさせている」、「子供のプライバシーを尊重している」、「子供のよいところをほめる等して自信を持たせるようにしている（＊）」、「子供に本や新聞を読むようにすすめている（＊）」、「子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている（＊）」、「子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした（＊）」、「普段、子供の勉強をみている」、「計画的に勉強するようにうながしている（＊）」、「子供が英語や外国の文化に触れるよう意識している（＊）」、「子供と一緒に美術館や劇場に行く（＊）」、「子供と一緒に博物館や科学館に行く（＊）」、「子供と一緒に図書館に行く（＊）」、「テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む）で遊ぶ時間を限定している（または、「持たせていない）」（＊）」、「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている（または、「持たせていない）」（＊）」、「子供から学校での出来事について話を聞いている」、「子供と勉強や成績のことについて話をする」、「子供と将来や進路について話をする」、「子供と友達のことについて話をする」、「子供と社会の出来事やニュースについて話をする」、「子供に高い学歴を期待する（＊）」、「子供が自立できるようにすることを重視する」、「人の気持ちが分かる人間になることを重視する」、「自分の意見をはっきり言えるようになることを重視する（＊）」、「将来の夢や目標に向かって努力することを重視する」、「（保護者が）学校の教育目標やその達成に向けた方策を知っている（＊）」、「（保護者が）学校や学級の教育活動に関する情報提供（学校のホームページ、学校だよりや学級だより等）は役に立っていると感じている（＊）」、「（保護者が）地域には、ボランティアで学校を支援する等、地域の子供たちの教育に関わってくれる人が多いと思っている（＊）」、「（保護者が）規則正しい生活を心がけている」、「（保護者が）地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がある（＊）」、「（保護者が）本を読む（＊）」、「（保護者が）テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る（＊）」、「（保護者が）新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む（＊）」。

第 18 章の集計表にも見られるように、前回と共通の項目（上記で（＊）がついた項目）については、今回も学力との関係で同様の傾向が確認できた。次節では、平成 29 年度調査での新設項目と学力の関係について見ていきたい。

(3) 平成 29 年度新設項目と子供の学力の関係

①保護者の単身赴任と子供の学力

図表 2-6 は、保護者が単身赴任中であるかどうかと、子供の学力の関係を見たものである。単身赴任に該当する家庭は全体から見ると多くはないが、次のような傾向が見られる：「父親が単身赴任の場合は、そうでない場合に比べやや学力が高い」、「母親が単身赴任の場合は、そうでない家庭に比べ、子供の学力は低い」。

図表 2-6 「現在、父親（または父親にかわる方）または母親（または母親にかわる方）は単身赴任中ですか」と学力の関係

		小 6					中 3				
		国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
父 親	はい	77.7	60.6	81.5	49.8	5.4	80.0	75.7	69.1	51.9	6.5
	いいえ	75.2	58.0	79.2	46.5	85.2	77.6	72.5	65.2	48.4	83.4
母 親	はい	65.2	46.9	66.7	36.5	0.6	61.4	52.1	46.2	35.5	0.5
	いいえ	75.2	57.9	79.1	46.4	93.9	77.7	72.5	65.0	48.3	93.8

②保護者の子供への働きかけと学力

保護者の子供への働きかけについては、「テレビ・ビデオ・DVD を見たり、聞いたりする時間等のルールを決めている」「子供と何のために勉強するかについて話している」「子供に努力することの大切さを伝えている」「子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている」家庭の子供が高学力の傾向にある（第 18 章，集計表参照）。

③保護者と子供との会話

保護者と子供との会話については、「子供から、学校での出来事や友達のことについて話をする」「保護者から、お子さんの学校での出来事や友達のことについて話をする」「子供から、勉強や成績のことについて話をする」「保護者から、勉強や成績のことについて話をする」「子供から、将来や進路についての話をする」「保護者から、将来や進路についての話をする」「子供から、地域や社会の出来事やニュースについて話をする」「保護者から、地域や社会の出来事やニュースについて話をする」家庭の子供が高学力の傾向にある（第 18 章，集計表参照）。

④教育意識や諸活動への参加と子供の学力

子供の教育について、「将来、子供に留学（海外学校への進学を含む）をしてほしいと思っている」「自分の考えをしっかりと伝えられるようになることを重視している」「地域や社会に貢献する等人の役に立つ人間になることを重視している」保護者の子供は、高学力の傾向にある。また、保護者自身が「PTA 活動や保護者会等への参加」をする家庭の子供は高学力の傾向にある（第 18 章，集計表参照）。

⑤家庭の蔵書数と子供の学力

図表 2-7 は、「家庭の蔵書数（電子書籍は含むが、漫画や雑誌，教科書，参考書，子供向けの本は除く）」と学力の関係を示したものである。これを見ると，蔵書数が多い家庭ほど，子供の学力が高いことがわかる。また，図表 2-8 は，「家庭にある子供向けの本の数」，と学力の関係を示したものである。子供の本に関しても，蔵書数が多い家庭ほど，子供の学力が高いという傾向を見て取ることができる。

図表 2-7 家庭の蔵書数（電子書籍は含むが、漫画や雑誌、教科書、参考書、子供向けの本は除く）と子供の学力の関係

	小 6					中 3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
0～10冊	69.6	50.2	72.4	38.7	23.7	70.4	63.1	55.0	40.0	22.2
11～25冊	73.5	55.2	77.0	43.6	22.3	75.6	69.8	62.0	45.5	22.7
26～100冊	76.6	59.9	80.7	48.1	34.2	79.7	75.3	67.8	50.4	36.1
101冊～200冊	78.9	63.9	83.8	52.8	9.6	82.4	78.5	71.8	54.3	9.7
201冊～500冊	81.0	66.8	86.2	56.7	5.8	84.5	81.1	74.9	57.9	5.3
501冊以上	82.5	68.3	87.2	58.2	2.5	85.4	81.2	75.7	58.6	2.4
不明	72.5	54.6	76.3	43.6	2.0	73.7	67.7	59.1	43.6	1.5

図表 2-8 家庭にある子供向けの本（電子書籍は含むが、漫画や雑誌、教科書、参考書は除く）と子供の学力の関係

	小 6					中 3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
0～10冊	69.0	49.4	72.0	38.1	22.4	72.3	65.7	57.5	42.0	31.6
11～25冊	73.5	55.4	76.9	43.6	26.7	76.9	71.7	64.1	47.1	27.5
26～50冊	76.7	59.8	80.8	48.1	26.7	80.3	75.8	68.5	51.2	23.0
51冊～100冊	79.0	63.8	83.6	52.3	15.5	82.7	78.9	72.0	54.8	11.4
101冊以上	82.4	68.3	87.1	57.9	7.2	85.4	82.0	76.0	58.7	5.2
不明	71.7	54.0	75.2	43.4	1.5	72.7	66.4	57.8	42.9	1.3

図表 2-9 家庭の社会経済的背景と蔵書数の関係（小 6 保護者）（%）

	0～10冊	11～25冊	26～100冊	101冊～200冊	201冊～500冊	501冊以上	合計
Lowest	45.0	25.7	23.5	3.8	1.4	0.5	100.0
Lower middle	27.6	28.2	34.5	6.0	2.9	0.9	100.0
Upper middle	17.9	23.6	40.3	10.7	5.6	1.9	100.0
Highest	5.7	13.7	41.3	18.7	14.0	6.7	100.0

ただ、ここで注意しておくべきことは、家庭の蔵書数や子供の本の数は、その家庭の社会経済的背景と関係が強いことである。図表 2-9 は、家庭の社会経済的背景と蔵書数との関係（小学校）を見たものであるが、明らかに、社会経済的背景が高いほど蔵書数が多いという傾向を見て取ることができる。

そこで、社会経済的背景を統制して、蔵書数と子供の学力の関係を見たのが、図表 2-10 である。これを見ると、社会経済的背景を統制しても蔵書数と学力の関係は残ることがわかる。ただ、関係の強さは、それほど強いものではない。また、注目されるのは、Lowest の「501冊以上」の家庭の子供よりも、Highest の「0～10冊」の家庭の子供のほうが学

力の平均値が高いということである。このような関係は、社会経済的背景・学習時間・学力の関係でも同様のことが指摘されている（お茶の水女子大学 2014）。なお、図表 2-11 は、「家庭にある子供向けの本の数」と学力の関係を SES 別に見たものであるが、図表 2-10 と同様の傾向がみられる。

図表 2-10 SES別に見た家庭の蔵書数と学力の関係（国語A）

国語A	小 6				中 3			
	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest
0～10冊	66.2	70.9	73.4	77.5	66.8	71.6	74.7	79.6
11～25冊	68.7	72.1	76.3	80.5	71.4	75.4	77.1	81.8
26～100冊	70.2	73.7	77.7	81.7	74.0	77.5	80.3	84.8
101冊～200冊	71.2	75.1	77.0	82.6	75.2	78.8	81.3	86.1
201冊～500冊	71.1	77.1	79.1	83.6	74.9	80.4	83.0	87.4
501冊以上	72.6	75.1	79.4	85.3	78.4	83.1	84.3	87.0

図表 2-11 SES別に見た「家庭にある子供向けの本の数」と学力の関係（国語A）

国語A	小 6				中 3			
	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest
0～10冊	65.6	69.9	73.1	76.4	68.2	72.7	75.7	81.3
11～25冊	68.6	72.5	75.5	79.7	71.6	75.5	78.2	83.4
26～50冊	70.2	73.8	77.9	81.8	73.2	78.5	81.0	84.8
51冊～100冊	73.0	74.9	77.8	83.3	76.2	79.4	81.7	86.6
101冊以上	73.6	78.7	81.2	85.0	77.4	82.1	83.9	88.1

⑥保護者の帰宅時間と子供の学力

図表 2-12 は父親、図表 2-13 は母親の「普段の帰宅時間で最も多い時間帯」と子供の学力の関係を見たものである。まず、父親について見ると、22 時以降（早朝帰宅を含む）という家庭の子供の学力が最も高い。一方、母親の帰宅時間について見てみると、「就業していない」と「16 時より前」の家庭の子供の学力が、相対的に高くなっている。

ただ、保護者の帰宅時間に関しても、SES との関係を考える必要がある。図表 2-14 は SES 別に父親の帰宅時間を、図表 2-15 は SES 別に母親の帰宅時間を見たものであるが、父親に関しては、SES が高い家庭ほど帰宅時間は遅くなる傾向がある。一方、母親のほうは、Highest SES において、「就業していない」の割合が高い。

図表 2-12 父親の帰宅時間と子供の学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
就業していない	68.9	49.5	68.3	38.8	0.6	74.8	65.9	58.7	42.9	0.8
16時より前	72.0	54.8	76.0	42.4	1.2	73.7	65.8	59.4	43.2	1.3
16時以降, 18時より前	72.4	53.5	75.9	42.3	7.9	74.2	68.4	59.9	44.0	7.8
18時以降, 20時より前	74.6	57.5	78.7	45.8	30.1	77.5	72.4	64.9	47.9	30.8
20時以降, 22時より前	77.0	60.2	81.3	49.0	26.0	79.8	75.2	69.0	51.5	25.5
22時以降 (早朝帰宅を含む)	77.9	61.2	82.1	50.5	14.1	79.8	75.7	69.0	51.9	12.1
交代制勤務等で帰宅時間が決まっていない	72.8	54.3	76.0	42.3	7.4	75.1	69.7	61.0	44.8	6.7
不明	70.8	52.7	73.0	40.3	12.8	73.6	66.7	57.1	42.4	15.1

図表 2-13 母親の帰宅時間と子供の学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
就業していない	76.7	60.5	80.8	49.3	16.1	79.0	74.1	66.8	50.1	12.5
16時より前	76.0	58.6	80.0	47.2	25.4	78.2	73.4	66.7	49.5	20.7
16時以降, 18時より前	73.8	55.7	77.4	44.2	26.6	77.4	71.9	64.8	47.9	29.3
18時以降, 20時より前	74.6	57.4	78.6	45.5	19.5	77.3	72.2	64.3	47.6	22.7
20時以降, 22時より前	73.9	56.6	77.1	45.9	2.6	76.3	71.3	63.0	47.1	3.7
22時以降 (早朝帰宅を含む)	69.2	51.8	71.3	39.6	1.2	71.5	64.6	54.5	40.8	1.7
交代制勤務等で帰宅時間が決まっていない	73.6	56.2	77.4	44.0	3.4	73.9	68.3	58.8	44.0	3.9
不明	72.2	54.3	74.8	43.1	5.2	73.7	67.0	57.8	42.9	5.5

図表 2-14 家庭の社会経済的背景と父親の帰宅時間の関係（小6）（%）

	就業して いない	16時よ り前	16時以 降, 18時 より前	18時以 降, 20時 より前	20時以 降, 22時 より前	22時以降 (早朝帰 宅含)	交代制勤務等で 帰宅時間が決ま っていない	合計
Lowest	1.9	2.7	17.0	39.5	17.7	9.5	11.7	100.0
Lower middle	0.4	1.3	10.4	37.0	27.2	12.3	11.4	100.0
Upper middle	0.5	0.9	6.8	34.0	32.9	17.0	7.9	100.0
Highest	0.3	0.7	3.6	28.8	39.0	24.1	3.6	100.0

図表 2-15 家庭の社会経済的背景と母親の帰宅時間の関係（小6）

	就業して いない	16時より 前	16時以 降, 18時 より前	18時以 降, 20時 より前	20時以 降, 22時 より前	22時以降 (早朝帰 宅含)	交代制勤務等で 帰宅時間が決ま っていない	合計
Lowest	14.7	25.1	33.7	18.0	2.0	2.5	3.8	100.0
Lower middle	13.7	27.9	30.7	20.1	2.7	1.3	3.5	100.0
Upper middle	16.6	28.1	27.1	20.7	2.4	0.8	4.3	100.0
Highest	22.9	26.1	20.7	23.4	3.8	0.5	2.6	100.0

図表 2-16 SES別にみた父親の帰宅時間と子供の学力の関係（国語A）

国語A	小6				中3			
	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest
就業していない	66.3	66.3	76.5	81.1	71.4	76.3	76.2	83.3
16時より前	67.2	74.5	76.0	77.0	67.8	74.8	77.2	80.4
16時以降18時より 前	67.9	73.4	75.9	80.3	70.2	74.7	77.4	81.7
18時以降, 20時よ り前	68.7	72.6	76.2	81.7	70.7	75.8	79.3	85.0
20時以降, 22時よ り前	68.2	72.7	77.4	82.4	71.3	76.1	79.4	85.2
22時以降（早朝帰宅 を含む）	69.1	74.0	77.4	82.7	71.2	76.3	79.3	85.1
交代制勤務等で帰宅時間が 決まっていない	68.7	71.6	75.7	80.0	70.6	74.5	77.8	82.0

保護者の帰宅時間と子供の学力の関係を SES 別にみると、帰宅時間と学力との関係はほとんどなくなる（父親については図表 2-16、母親については図表 2-17、学力はいずれも国語 A）。つまり、同じ SES 内で比較すれば、保護者の帰宅時間と子供の学力との間に明確な関係は見られなくなる。父親の帰宅時間については、いずれの SES においても、「18 時以降、20 時より前」「20 時以降、22 時より前」「22 時以降（早朝帰宅を含む）」（これら三つの時間帯が全体のおよそ 7 割に該当する）の間にほとんど学力の差は見られない。また、母親についてみると、いずれの SES においても、「就業していない」「16 時より前」「16 時以降、18 時より前」「18 時以降、20 時より前」（これら四つの回答が全体のおよそ 85% に該当する）の間にほとんど学力の差は見られない。

図表 2-17 SES 別にみた母親の帰宅時間と子供の学力の関係（国語 A）

国語A	小 6				中 3			
	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest
就業していない	67.8	72.8	77.8	83.4	70.6	77.2	80.3	85.6
16時より前	68.6	74.0	78.2	82.5	70.9	76.2	80.1	85.2
16時以降、18時より前	68.6	72.2	76.1	81.3	71.1	75.9	79.3	85.0
18時以降、20時より前	67.8	72.0	75.4	81.2	70.8	75.1	77.9	84.6
20時以降、22時より前	66.7	70.1	74.3	80.0	68.6	74.8	77.4	83.3
22時以降（早朝帰宅を含む）	65.6	70.7	68.6	83.6	66.9	70.9	77.5	82.8
交代制勤務等で帰宅時間が決まっていない	67.3	74.8	73.4	80.3	68.8	72.8	75.0	81.5

（参考文献）

お茶の水女子大学, 2014, 『平成 25 年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究』

第3章 家庭の社会経済的背景・「非認知スキル」・子供の学力

山田 哲也

(1) はじめに

本章では、タイトルに示す通り、①家庭の社会経済的背景 (SES)、②「非認知スキル」、③子供の学力がそれぞれどのように関連するのかを検討する。

SESが学力に影響を与えることについては、本報告書の他の章をはじめ、すでに一定の知見が蓄積されているが、学力と同様、あるいは論者によってはそれ以上にその後のライフチャンスを規定すると主張されている「非認知スキル (Non-cognitive skills)」の形成に、SESはどの程度の影響を及ぼすのだろうか。また、学力のような認知能力 (Cognitive skills) と「非認知スキル」はそれぞれ異なる性格をもつとされているが、両者はどのように関連するのだろうか。

以下では、三つの変数間の関係を確認したうえで、保護者のどのような働きかけが「非認知スキル」を高める効果をもつかについて若干の検討を加えたい。

(2) 「非認知スキル」尺度得点の算出方法

子供たちの「非認知スキル」を把握するため、今回は児童生徒質問紙の設問から、関連すると思われる八つの項目を選び、主成分分析をかけて合成変数 (成分得点) を算出したところ、小・中学校とも全体の分散の39.9%を説明する一次元性の高い尺度が得られた。算出に用いた元の設問と因子負荷量 (主成分負荷量) は図表 3-1・図表 3-2 に示す通りである。

図表 3-1 「非認知スキル」算出に用いた変数と因子負荷量 (小学校)

非認知スキル算出に用いた設問	因子負荷量
ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある	0.616
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している	0.665
自分には、よいところがあると思う	0.615
友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ	0.638
友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる	0.496
友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる	0.679
学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている *	0.684
学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある *	0.641

「あてはまる」=4点、「どちらかといえば、あてはまる」=3点、「どちらかといえば、あてはまらない」=2点 「あてはまらない」=1点を与え、算出

*の項目は「そう思う」=4点、「どちらかといえばそう思う」=3点、「どちらかといえばそう思わない」=2点、「そう思わない」=1点にカウントした

上記8項目から算出したクロンバックの α 係数は0.780

図表 3-2 「非認知スキル」算出に用いた変数と因子負荷量（中学校）

非認知スキル算出に用いた設問	因子負荷量
ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある	0.610
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している	0.687
自分には、よいところがあると思う	0.643
友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ	0.638
友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる	0.518
友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる	0.679
学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている *	0.650
学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある *	0.609

「あてはまる」=4点、「どちらかといえば、あてはまる」=3点、「どちらかといえば、あてはまらない」=2点 「あてはまらない」=1点を与え、算出

* の項目は「そう思う」=4点、「どちらかといえばそう思う」=3点、「どちらかといえばそう思わない」=2点、「そう思わない」=1点にカウントした

上記8項目から算出したクロンバックの α 係数は0.779

(3) 社会経済的背景・「非認知スキル」・子供の学力間の相関

前節で算出した「非認知スキル」尺度得点と保護者のSES，そして子供の学力（国語・算数／数学AB問題の総正答率）との関連性をみるために，相関係数を整理した（図表 3-3，図表 3-4）。

図表 3-3 SES・「非認知スキル」・学力間の相関係数（小学校）

	総正答率 (国語算数AB)	非認知スキル	SES
総正答率 (国語算数AB)	1		
非認知スキル	0.27	1	
SES	0.38	0.15	1

すべてのセルで $p < 0.001$

図表 3-4 SES・「非認知スキル」・学力間の相関係数（中学校）

	総正答率 (国語算数AB)	非認知スキル	SES
総正答率 (国語算数AB)	1		
非認知スキル	0.20	1	
SES	0.39	0.10	1

すべてのセルで $p < 0.001$

「非認知スキル」と学力の相関係数は小学校では0.27，中学校では0.20とゆるやかな相関(小学校のほうがやや係数が大きい)が，SESと学力の相関係数はおよそ小学校では0.38，

中学校では0.39と中程度の相関が認められる。

他方で、「非認知スキル」とSESの間にはあまり相関が認められない（小学校の相関係数は0.15，中学校では0.10）。SESと「非認知スキル」のそれぞれは学力と密接な関係があるが、二つの変数は相互に独立した関係にあると見てよいだろう。

このことは、SESが相対的に低い場合でも、もし「非認知スキル」を高めることができれば、学力を一定程度押し上げる可能性があることを示唆している。この点を確認するために、SESと「非認知スキル」を独立変数、学力（国語・算数／数学AB問題の総正答率）を従属変数にした重回帰分析を行った（図表3-5・図表3-6）。

図表3-5 学力にSESと「非認知スキル」が与える影響（重回帰分析・小学校）

	B	SE	ベータ
定数(切片)	66.775	0.017	
非認知スキル尺度得点	4.318	0.019	0.213 ***
SESスコア	6.194	0.017	0.344 ***
調整済みR二乗値	0.186		

(従属変数：国語AB・算数AB問題の総正答率) *** p.<0.001

図表3-6 学力にSESと「非認知スキル」が与える影響（重回帰分析・中学校）

	B	SE	ベータ
定数(切片)	67.330	0.018	
非認知スキル尺度得点	3.518	0.020	0.164 ***
SESスコア	7.130	0.018	0.374 ***
調整済みR二乗値	0.179		

(従属変数：国語AB・数学AB問題の総正答率) *** p.<0.001

SESスコアと比べると標準化回帰係数（ベータ）の値が小さいが、保護者の社会経済的背景を統制したうえでも、「非認知スキル」に学力を上げる独自の効果が認められ、上記の可能性を裏づける結果が得られた。

（４）保護者による関与は子供の「非認知スキル」を高めるのか？

「非認知スキル」の獲得が学力に与える影響がたとえ限定的であったとしても、「非認知スキル」には独自の効果があり、このスキルが高いほうが、その後のライフチャンスが拡大することがすでに多くの論者によって指摘されている。学力との関係の如何を問わず、「非認知スキル」を高める方法を見出すことには意義がある。

そこで、ここでは保護者質問紙調査のなかから子供への関与について尋ねた質問項目に着目し、どのような関わり方が「非認知スキル」の向上につながるのかを検討してみたい。SESが高い家庭の保護者ほど、子供に対して積極的に関与する傾向が認められるので、以下の分析では、SESを統制したうえでも一定の効果が認められる関わり方を模索してみたい。具体的には、保護者の関与に関する質問を独立変数、「非認知スキル」尺度得点を従

属変数にした単回帰分析を行い、SESをこの回帰式に投入した後の標準化回帰係数の変化を比較してみた。

図表 3-7, 図表 3-8 は小中学校別に分析結果をまとめたものである。

図表 3-7 「非認知スキル」の規定要因（回帰分析・小学校）

	標準化回帰係数 (SES統制前)	調整済み R2	標準化回帰係数 (SES統制後)	調整済み R2
子供が決まった時刻に起きよう(起こすよう)にしている	0.071	0.005	0.063	0.028
子供を決まった時刻に寝かせるようにしている	0.080	0.006	0.071	0.029
毎日子供に朝食を食べさせている	0.101	0.010	0.079	0.030
テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間などのルールを決めている	0.119	0.014	0.095	0.033
テレビゲームをする時間を限定している	0.117	0.014	0.096	0.031
携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている	0.088	0.008	0.073	0.031
子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている	0.115	0.013	0.105	0.035
子供が悪いことをしたらきちんと叱っている	0.078	0.006	0.073	0.029
子供に本や新聞を読むようにすすめている	0.129	0.017	0.092	0.032
子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている	0.116	0.013	0.090	0.031
子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした	0.102	0.010	0.073	0.029
子供と何のために勉強するかについて話している	0.111	0.012	0.083	0.031
計画的に勉強するよう子供に促している	0.128	0.016	0.096	0.033
子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している	0.125	0.016	0.090	0.032
子供に努力することの大切さを伝えている	0.149	0.022	0.131	0.041
子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている	0.144	0.021	0.130	0.041
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと家庭で話し合っている	0.077	0.006	0.080	0.030
地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう子供に促している	0.100	0.010	0.094	0.033

標準化回帰係数が 0.1 以上の項目に網掛けをしている。分散分析の結果はすべて $p < 0.001$

図表 3-8 「非認知スキル」の規定要因（回帰分析・中学校）

	標準化回帰係数 (SES統制前)	調整済み R2	標準化回帰係数 (SES統制後)	調整済み R2
子供が決まった時刻に起きよう(起こすよう)にしている	0.062	0.004	0.057	0.013
子供を決まった時刻に寝かせるようにしている	0.070	0.005	0.062	0.014
毎日子供に朝食を食べさせている	0.113	0.013	0.101	0.020
テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間などのルールを決めている	0.086	0.007	0.074	0.015
テレビゲームをする時間を限定している	0.082	0.007	0.070	0.014
携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている	0.067	0.005	0.058	0.014
子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている	0.121	0.015	0.116	0.023
子供が悪いことをしたらきちんと叱っている	0.086	0.007	0.083	0.017
子供に本や新聞を読むようにすすめている	0.068	0.005	0.049	0.012
子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている	0.071	0.005	0.058	0.013
子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした	0.067	0.005	0.050	0.012
子供と何のために勉強するかについて話している	0.079	0.006	0.065	0.014
計画的に勉強するよう子供に促している	0.089	0.008	0.073	0.015
子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している	0.114	0.013	0.098	0.019
子供に努力することの大切さを伝えている	0.116	0.013	0.107	0.021
子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている	0.121	0.015	0.114	0.023
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと家庭で話し合っている	0.070	0.005	0.072	0.015
地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう子供に促している	0.103	0.011	0.102	0.020

標準化回帰係数が 0.1 以上の項目に網掛けをしている。分散分析の結果はすべて $p < 0.001$

これらの図表から言えることは、次の3点である。第一に、調整済みR²乗値は0.004～0.041と非常に小さく（モデルの当てはまりが悪く）、「非認知スキル」は今回検討した変数以外の要因から影響を受けている可能性が高い。

第二に、それでもあえて保護者による関与が「非認知スキル」に与える影響力を比較す

ると、小学校のほうが中学校よりも標準化回帰係数の値が大きくなる傾向があり、「非認知スキル」の獲得は子供がより年少の時点の経験によって決まることを窺わせる。先行研究では、乳幼児期の環境が「非認知スキル」の獲得に大きく影響することが明らかになっており、既存の知見と整合する結果である。

第三に、保護者のSESを統制するとほとんどの項目で標準化回帰係数が小さくなる。統制後も回帰係数が0.1以上の値を示す項目（網掛け）は、小学校では「子供のよいところをほめる等して自信を持たせるようにしている」「子供に努力することの大切さを伝えている」「子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている」の4項目、中学校では「毎日子供に朝食を食べさせている」「子供のよいところをほめる等して自信を持たせるようにしている」「子供に努力することの大切さを伝えている」「子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている」「地域社会等でのボランティア活動等に参加するよう子供に促している」の5項目であった。ほめて自信を持たせる、努力や最後までやり抜くことの大切さを伝える関わりには、小中ともに「非認知スキル」を高める効果が認められた。

ただし、繰り返しになるが第二、第三の結果はあてはまりの悪いモデルから導出された相対的な差異に過ぎない。「非認知スキル」を高める要因については、今後もさらなる検討を重ねる必要がある。

第4章 小学生の学力と家庭の文化的環境

金子真理子

1. はじめに

本章では、小学生の学力と家庭の文化的環境との関連を、問題の種別（国語 A 問題、国語 B 問題、算数 A 問題、算数 B 問題）ごとに明らかにしたい。両者の間にはどのような関連性がみられるのだろうか。

子供の学力と家庭の文化的環境の関連性は、文化的再生産論をはじめとして長らく議論されてきた。一方、日本の場合、欧米諸国と比べれば、家庭の文化的環境の違いが明確には見いだされにくいとみなされてきた。たしかに多くの親は、子供の教育に関心を持っているし、子供の成長を願い、子供と多くの会話を持っているのは共通していると思われる。

本章は、保護者調査の結果をもとに、子供を育てる多くの家庭で共通している文化的環境を確認しつつ、子供の学力階層別に見ると家庭の文化的環境の差異がどこに見られるのかを明らかにしたい。以下では、子供の学力層別に、保護者調査の結果を確認していこう。

2. 子供の普段の生活

図表 4-1 は、保護者調査において、「お子さんの普段の様子について、次のことはどれくらいあてはまりますか。」と尋ね、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた合計の割合を示したものである。「よく本を読んでいる」と「親が言わなくても、自分から勉強している」は、国語 A、国語 B、算数 A、算数 B のすべての問題で、学力 A 層と学力 D 層の間に 20 ポイント以上の差がある。

まず、学力 A 層の保護者では 5 割程度、学力 D 層の保護者では 2 割程度が、自分の子供が「よく本を読んでいる」と回答しているが、最も大きなポイント差があったのは国語 B 問題である。同じ教科内で比べてみても、B 問題のほうが A 問題よりもポイント差は大きい。子供の読書は、知識そのものを問う問題以上に、知識の活用力を問う問題の正答率に影響力を持っている可能性がある。次に、「親が言わなくても、自分から勉強している」と答えた保護者の割合は、すべての問題種別で、学力 A 層で 7 割台、学力 D 層で 4 割台と、これも両者の間で 30 ポイント近い差がみられる。

一方、学校に対する子供の姿勢・態度を尋ねた、「学校に行くことを楽しみにしている」「学校の先生を信頼している」という質問項目に関しては、以上の二項目に比べると子供の学力による保護者の回答の差は小さい。いずれの学力層においても 8 割以上の保護者が、自分の子供が学校を楽しみにし、先生を信頼していると捉えている。

図表4-1 子供の普段の様子と学力層

	国語A					国語B					算数A					算数B				
	A層	B層	C層	D層	差 A-D	A層	B層	C層	D層	差 A-D	A層	B層	C層	D層	差 A-D	A層	B層	C層	D層	差 A-D
よく本を読んでいる（本は、電子書籍は含みますが、漫画や雑誌、教科書、参考書は除きます）	51.7%	40.7%	31.3%	20.0%	31.7	55.8%	38.8%	28.9%	19.1%	36.7	49.8%	38.5%	33.3%	23.4%	26.4	52.7%	40.6%	30.6%	22.1%	30.6
親が言わなくても、自分から勉強している	71.7%	63.1%	57.4%	44.3%	27.4	72.7%	62.8%	56.1%	45.1%	27.6	71.2%	62.5%	57.7%	45.3%	25.9	72.3%	63.8%	56.5%	44.3%	28.0
学校に行くことを楽しみにしている	90.2%	89.7%	88.0%	84.4%	5.8	90.1%	89.2%	87.5%	85.0%	5.1	90.3%	89.0%	88.5%	83.9%	6.4	90.3%	89.3%	87.9%	84.1%	6.2
学校の先生を信頼している	89.6%	88.9%	87.7%	84.7%	4.9	89.8%	88.5%	87.3%	85.2%	4.6	90.2%	88.7%	87.3%	84.4%	5.8	90.1%	88.9%	87.6%	83.8%	6.3

注1) 数値は、「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」と答えた合計の割合。ただし、差の数値は、A-Dのポイント差を表す。2) 無回答・不明は除いて計算してある。3) 網掛けは10ポイント以上の差があることを示す。4) 学力層による差は、すべての分析でカイ二乗検定1%水準で有意。

3. 保護者の子供に対する接し方

図表4-2は、「あなたのご家庭では、お子さんに対して、次のことをしていますか」と尋ね、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた合計の割合を示したものである。いわゆる「早寝・早起き・朝ごはん」等の生活習慣については、どの学力層の子供の保護者も、8割から9割が気を配っていることがわかる。一方で、「テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間などのルールを決めている」については学力A層で6割、学力D層で5割があてはまると答えており、10ポイント以上の差がある。

次に、子供に対する自らのほめ方、叱り方に関する認知は、学力階層別に大きなポイント差はみられず、9割近い保護者が「お子さんの良いところをほめるなどして自信を持たせるようにしている」、10割近い保護者が「お子さんが悪いことをしたらきちんと叱っている」と自己認知している。また、子供の努力を促すような接し方に関する項目、「お子さんに努力することの大切さを伝えている」「お子さんに最後までやり抜くことの大切さを伝えている」については、どの問題種別のどの学力層の保護者においても、9割があてはまると答えていて、大きなポイント差は認められない。さらに、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと家庭で話し合っている」割合は9割以上で、学力A層よりも学力D層の保護者のほうがあてはまると答えた割合が若干高い。

一方、学力階層別のポイント差が特に大きかったのは、「テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間などのルールを決めている」「テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をする時間を限定している」「お子さんに本や新聞を読むようにすすめている」「お子さんと読んだ本の感想を話し合ったりしている」「お子さんが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「計画的に勉強するように促している」「お子さんが外国語や外国の文化に触れるよう意識している」等で、問題種別によらず、いずれも学力が高い層であてはまると答えた割合が高い。

どの学力層の保護者も、子供に基本的な生活習慣、努力の価値、道徳を伝えていることがわかった。一方で、次のような文化には差が見られた。すなわち、学力の高い子供の家庭ほど、子供の時間の使い方をコントロールし、計画的に勉強させるだけでなく、本や新聞等の活字文化や、外国語や外国の文化に触れる機会を意識的に作っているといえる。

図表4-2 保護者の子供に対する接し方と学力層	国語A				国語B				算数A				算数B							
	差		差		差		差		差		差		差		差					
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層				
お子さんが決まった時刻に起きるよう(起こすよう)にしている	96.7%	96.3%	96.1%	95.2%	1.5	96.6%	96.2%	96.3%	95.3%	1.3	96.9%	95.8%	96.2%	95.0%	1.9	96.7%	96.6%	95.8%	95.1%	1.6
お子さんの決まった時刻に毎日お子さんにしている	84.1%	83.3%	82.2%	80.1%	4.0	84.0%	82.8%	83.0%	80.3%	3.7	84.9%	83.1%	81.8%	79.4%	5.5	84.9%	82.9%	81.4%	80.0%	4.9
テレビ・ビデオ・DVDを視聴したり、聞いたりする時間などのルールを決めている	98.1%	97.4%	96.6%	94.4%	3.7	98.2%	97.4%	96.3%	94.4%	1.9	98.4%	97.5%	96.6%	93.8%	4.6	98.2%	97.4%	96.1%	94.5%	3.7
テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む)をする時間を限定している	62.8%	58.5%	55.1%	50.3%	12.5	63.1%	57.5%	55.1%	51.4%	11.7	63.6%	58.5%	54.3%	50.2%	13.4	63.5%	57.6%	54.5%	51.7%	11.8
携帯電話やスマートフォンを使い方についてルールや約束をつくっている	62.0%	60.0%	57.5%	53.0%	9.0	62.1%	59.3%	57.4%	53.7%	8.4	63.0%	59.7%	56.6%	52.8%	10.2	63.1%	58.8%	56.6%	53.3%	9.8
お子さんのよいところをほめるなどして自信を持たせようとしている	49.7%	50.4%	51.2%	49.9%	-0.2	49.9%	50.4%	50.8%	49.6%	0.3	49.1%	50.0%	51.0%	51.2%	-2.1	49.0%	50.3%	50.5%	51.1%	-2.1
お子さんが悪いことをしたときに叱っている	90.1%	90.1%	89.3%	87.6%	2.5	90.5%	89.6%	89.1%	87.5%	3.0	90.3%	89.5%	89.3%	87.5%	2.8	90.6%	89.6%	89.3%	86.9%	3.7
お子さんに本や新聞を読むようにすすめている	99.1%	99.2%	98.9%	98.5%	0.6	99.2%	99.0%	98.9%	98.5%	0.7	99.2%	99.1%	98.9%	98.5%	0.7	99.2%	99.1%	99.0%	98.4%	0.8
お子さんと読んだ本の感想を話し合ったりしている	73.5%	68.6%	62.1%	54.1%	19.4	75.1%	66.9%	60.7%	54.5%	20.6	74.6%	66.4%	62.8%	53.3%	21.3	75.2%	67.5%	61.0%	54.1%	21.1
お子さんが小さいころ、絵本を読み聞かせをした	44.4%	38.6%	33.5%	27.9%	7.1	45.4%	38.0%	33.3%	27.5%	17.9	44.1%	37.3%	34.7%	28.4%	15.7	45.3%	37.8%	33.5%	28.7%	16.6
お子さんと何のために勉強するかについて話している	81.9%	78.9%	74.6%	67.8%	14.1	83.5%	77.5%	74.4%	67.3%	16.2	81.7%	78.0%	75.2%	68.2%	13.5	82.8%	78.0%	74.1%	68.1%	14.7
お子さんが外国語や外国の文化に触れるよう意識している	78.3%	75.6%	73.5%	70.3%	8.0	79.4%	74.7%	72.9%	70.7%	8.7	79.4%	76.2%	72.4%	69.6%	9.8	79.4%	75.4%	72.0%	71.3%	8.1
お子さんに努力することの大切さを伝えていく	81.9%	78.7%	74.8%	70.3%	11.6	82.5%	77.7%	74.7%	70.7%	11.8	83.0%	78.6%	74.5%	69.2%	13.8	83.0%	78.6%	73.9%	70.0%	13.0
お子さんが外国語や外国の文化に触れるよう意識している	50.4%	45.4%	40.3%	34.0%	16.4	50.7%	44.8%	40.2%	34.3%	16.4	51.5%	43.6%	40.6%	33.4%	18.1	51.8%	45.1%	39.0%	34.4%	17.4
お子さんに努力することの大切さを伝えていく	93.1%	92.2%	91.7%	89.7%	3.4	93.1%	91.7%	91.5%	90.5%	2.6	93.4%	92.0%	91.7%	89.3%	4.1	93.2%	92.4%	90.8%	90.0%	3.2
お子さんに最後までやり抜くことの大切さを伝えていく	93.4%	92.1%	92.0%	91.0%	2.4	93.3%	92.3%	92.6%	91.1%	2.2	93.5%	92.5%	92.6%	89.9%	3.6	93.4%	92.8%	91.6%	90.8%	2.6
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと家庭で話している	94.6%	94.4%	95.1%	95.2%	-0.6	94.2%	94.7%	95.4%	95.2%	-1.0	94.5%	94.4%	95.1%	95.1%	-0.6	94.2%	94.7%	95.1%	95.3%	-1.1
地域社会などでのボランティア活動等に参加するようお子さんに促している	41.5%	41.5%	40.1%	39.0%	2.5	41.6%	40.7%	40.6%	39.6%	2.0	42.0%	40.6%	40.3%	38.7%	3.3	42.3%	41.1%	39.2%	39.2%	3.1

注1) 数値は、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」と答えた合計の割合、ただし、差の数値は、A-Dのポイント差を表す。2) 無回答・不明は除いて計算してある。3) 網掛けは10ポイント以上の差があることを示す。4) 学力層は、すべての分析でカイ二乗検定1%水準で有意。

4. 子供とのコミュニケーション

図表4-3は、「あなたは日頃の生活の中で、お子さんと次のような話をしますか」と尋ね、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた合計の割合を示したものである。どの学力階層の保護者も子供といろいろな話をしている。特に「学校での出来事や友達のこと」については、保護者から子供に話をする者と答えた者も、逆に子供から保護者に話をする者と答えた者も、それぞれ約9割に上る。子供の身近な話題に関しては、双方向の会話が生まれていることがわかる。

次に、「勉強や成績のこと」「将来や進路」「地域や社会の出来事やニュース」といった話題はどうだろうか。「あなたから、勉強や成績のことについて話をする」「あなたから、将来や進路についての話をする」「あなたから、地域や社会の出来事やニュースについて話をする」については、低学力層より高学力層のほうが若干高めとはいえ、いずれの学力階層の保

護者においても、それぞれ8割強、7割強、7～8割があてはまると答えている。これに対し、学力A層と学力D層の回答に10ポイント以上の差がみられたのは、子供を話題の発信者とする次の3項目であった。「お子さんから、勉強や成績のことについて話をする」については学力A層で8割弱、学力D層で約65%、「お子さんから、将来や進路についての話をする」については学力A層で約65%、学力D層で約55%、「お子さんから、地域や社会の出来事やニュースについて話をする」については学力A層で7割強、学力D層で約6割があてはまると答えている。すなわち、「学校での出来事や友達のこと」とどまらず、「勉強や成績のこと」「将来や進路」「地域や社会の出来事やニュース」についても、子供の側からも積極的に話すコミュニケーションがとれていることが、高学力層の子供の家庭的文化的特徴の一つといえる。

図表4-3 保護者と子供のコミュニケーションと学力層

	国語A					国語B					算数A					算数B				
	A層	B層	C層	D層	差A-D	A層	B層	C層	D層	差A-D	A層	B層	C層	D層	差A-D	A層	B層	C層	D層	差A-D
お子さんから、学校での出来事や友達のことについて話をする	90.9%	90.2%	89.0%	88.2%	2.7	90.7%	89.9%	89.5%	88.3%	2.4	89.6%	89.2%	90.4%	89.4%	0.2	89.3%	90.2%	90.0%	89.1%	0.2
あなたから、お子さんの学校での出来事や友達のことについて話をする	93.3%	92.9%	92.8%	92.3%	1.0	93.1%	92.8%	92.7%	92.7%	0.4	93.2%	92.5%	93.3%	91.9%	1.3	92.9%	93.0%	93.0%	92.5%	0.4
お子さんから、勉強や成績のことについて話をする	79.9%	75.4%	71.6%	64.5%	15.4	79.8%	75.1%	71.7%	65.2%	13.8	79.4%	75.0%	71.9%	65.5%	13.9	79.7%	74.6%	72.3%	65.2%	14.5
あなたから、勉強や成績のことについて話をする	85.8%	85.0%	84.7%	82.5%	3.3	85.8%	84.9%	83.9%	83.4%	2.4	86.3%	85.3%	84.1%	82.3%	4.0	86.0%	84.4%	84.5%	82.6%	3.4
お子さんから、将来や進路についての話をする	66.6%	62.9%	59.7%	54.7%	11.9	66.2%	63.3%	59.9%	54.9%	11.3	65.5%	61.0%	60.7%	56.9%	8.6	65.4%	62.5%	60.9%	55.9%	9.5
あなたから、将来や進路についての話をする	78.2%	75.2%	73.6%	71.3%	6.9	77.7%	75.3%	73.9%	72.2%	5.5	78.3%	75.5%	73.3%	71.6%	6.7	77.9%	75.0%	74.3%	71.8%	6.1
お子さんから、地域や社会の出来事やニュースについて話をする	71.3%	68.3%	64.2%	59.2%	12.1	71.3%	67.9%	64.0%	59.4%	11.9	70.6%	66.6%	65.0%	61.2%	9.4	71.4%	66.6%	64.5%	60.7%	10.7
あなたから、地域や社会の出来事やニュースについて話をする	80.9%	78.2%	77.0%	72.9%	8.0	80.7%	78.9%	75.4%	73.6%	7.1	80.9%	78.6%	76.3%	73.6%	7.3	81.4%	78.4%	76.0%	73.4%	8.0
お子さんの心配事や悩み事の相談によく乗っている	85.4%	85.5%	84.3%	84.1%	1.3	84.8%	85.4%	85.5%	84.1%	0.7	84.8%	84.3%	85.1%	85.1%	-0.3	84.2%	85.4%	85.4%	84.4%	-0.2

注1) 数値は、「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」と答えた合計の割合。ただし、差の数値は、A-Dのポイント差を表す。2) 無回答・不明は除いて計算してある。3) 網掛けは10ポイント以上の差があることを示す。4) 学力層による差は、すべての分析でカイ二乗検定1%水準で有意。

4. 文化施設の利用頻度

図表4-4は、美術館等の文化施設に子供と一緒にいく頻度を尋ねた結果である。美術館や劇場に行く頻度は、学力A層においてもそれほど高くはなく、いずれの学力層においても「ほとんど行かない」と答えた割合が最多で3割以上を占める。ただし、「行ったことがない」と答えた割合は、いずれの問題種別で見ても、学力D層で2割を超え、学力A層より10ポイント程度高くなっている。また、博物館や科学館についても学力が低い層で「行ったことがない」と「ほとんど行かない」と答えた割合が高くなっている。

これに対し、図書館の利用頻度は、美術館や劇場、博物館や科学館に比べて、いずれの学力層においても全体的に高い。ただし、「月に一回以上」と答えた割合は、学力A層で15%程度、学力D層では5%程度にとどまる。他の文化施設に比べれば、「近隣にないため行く

ことができない」と答えた割合はわずか1,2%程度にもかかわらず、いずれの問題種別でも「ほとんど行かない」と答えた割合が、学力A層で2割、学力D層では35%程度いる。誰もが無料で活字文化に触れることができるという点で、経済的格差の影響力を縮小する可能性を秘めた図書館であるが、特に学力D層の子供の利用が少ないということが、文化的格差の一面といえるのではないだろうか。

図表4-4 文化施設の利用頻度と学力層

		国語A					国語B					算数A					算数B				
		A層	B層	C層	D層	差 A-D	A層	B層	C層	D層	差 A-D	A層	B層	C層	D層	差 A-D	A層	B層	C層	D層	差 A-D
あなたの ご家庭では、お さんと一 緒に美術 館や劇場 にどれく らい行き ますか	月に1回 以上	0.7%	0.6%	0.4%	0.4%	0.3	0.6%	0.5%	0.5%	0.4%	0.2	0.6%	0.6%	0.4%	0.5%	0.1	0.6%	0.5%	0.5%	0.4%	0.2
	2～3か 月に1回 程度	5.7%	4.3%	4.3%	3.8%	1.9	5.8%	4.6%	4.0%	3.8%	2.0	5.5%	4.9%	4.2%	3.8%	1.7	5.7%	4.6%	4.0%	4.1%	1.6
	半年に1 回程度	11.6%	10.6%	9.0%	7.7%	3.9	12.1%	10.0%	9.3%	7.6%	4.5	11.8%	10.0%	9.1%	7.9%	3.9	12.2%	9.7%	9.2%	7.9%	4.3
	1年に1 回程度	17.8%	16.1%	14.7%	12.5%	5.3	18.5%	15.8%	13.7%	12.6%	5.9	18.0%	15.7%	14.9%	12.4%	5.6	18.4%	15.7%	14.2%	12.9%	5.5
	2～3年 に1回程 度	10.9%	10.3%	8.9%	7.9%	3.0	10.9%	10.1%	9.2%	8.0%	2.9	10.8%	9.8%	9.4%	7.8%	3.0	11.2%	10.0%	9.3%	7.7%	3.5
	ほとん ど行か ない	32.4%	34.3%	33.9%	35.3%	-2.9	32.2%	33.9%	34.7%	34.9%	-2.7	32.6%	34.3%	34.2%	34.6%	-2.0	31.7%	34.9%	34.4%	34.2%	-2.5
	行っ たこ とが ない	14.7%	17.1%	20.9%	23.7%	-9.0	13.9%	18.0%	21.3%	23.9%	-10.0	14.3%	18.3%	20.3%	24.1%	-9.8	14.0%	18.0%	20.6%	24.0%	-10.0
あなたの ご家庭では、お さんと一 緒に博物 館や科学 館にどれ くらい行 きますか	月に1回 以上	0.5%	0.4%	0.2%	0.3%	0.2	0.5%	0.4%	0.3%	0.2%	0.3	0.5%	0.4%	0.2%	0.2%	0.3	0.6%	0.3%	0.3%	0.2%	0.4
	2～3か 月に1回 程度	4.3%	3.3%	2.9%	2.4%	1.9	4.4%	3.5%	2.5%	2.4%	2.0	4.5%	3.4%	2.8%	2.0%	2.5	5.1%	3.0%	2.5%	2.4%	2.7
	半年に1 回程度	13.2%	10.9%	9.7%	8.1%	5.1	13.8%	10.8%	9.4%	7.8%	6.0	13.6%	11.3%	9.6%	7.4%	6.2	14.2%	10.3%	9.9%	7.5%	6.7
	1年に1 回程度	26.3%	24.2%	22.5%	19.1%	7.2	27.0%	23.3%	22.3%	19.8%	7.2	26.4%	24.1%	22.1%	19.4%	7.0	27.1%	23.6%	21.5%	20.1%	7.0
	2～3年 に1回程 度	18.8%	19.3%	18.5%	17.8%	1.0	18.2%	19.2%	18.6%	18.2%	0	18.9%	19.5%	18.4%	17.7%	1.2	18.8%	19.6%	18.6%	17.2%	1.6
	ほとん ど行か ない	26.5%	29.3%	31.3%	34.1%	-7.6	26.1%	29.7%	32.1%	33.1%	-7.0	25.8%	29.5%	31.9%	34.0%	-8.2	24.5%	30.5%	32.0%	33.8%	-9.3
	行っ たこ とが ない	5.7%	7.4%	8.9%	11.2%	-5.5	5.2%	7.6%	9.3%	11.4%	-6.2	5.4%	7.0%	8.7%	12.0%	-6.6	5.2%	7.3%	9.2%	11.7%	-6.5
あなたの ご家庭では、お さんと一 緒に図書 館にどれ くらい行 きますか	月に1回 以上	15.4%	11.5%	8.5%	5.3%	10.1	16.8%	10.5%	7.6%	5.6%	11.2	15.6%	10.4%	8.9%	5.8%	9.8	16.6%	10.6%	8.1%	6.3%	10.3
	2～3か 月に1回 程度	19.9%	16.8%	14.5%	11.3%	8.6	20.2%	17.2%	14.1%	11.0%	9.2	19.9%	17.0%	14.9%	10.7%	9.2	20.4%	17.1%	14.3%	10.9%	9.5
	半年に1 回程度	18.0%	18.2%	17.0%	14.8%	3.2	17.7%	18.0%	16.7%	15.0%	2.7	17.9%	17.6%	17.2%	15.1%	2.8	17.9%	18.1%	16.6%	15.0%	2.9
	1年に1 回程度	14.1%	15.8%	16.2%	15.0%	-0.9	14.0%	15.4%	16.1%	15.4%	-1.4	14.1%	16.1%	15.7%	15.3%	-1.2	14.2%	14.9%	16.5%	14.7%	-0.5
	2～3年 に1回程 度	4.9%	5.6%	6.5%	6.3%	-1.4	4.8%	5.6%	6.6%	6.5%	-1.7	4.8%	5.9%	6.0%	6.5%	-1.7	4.7%	5.9%	5.9%	6.8%	-2.1
	ほとん ど行か ない	22.4%	25.5%	29.1%	35.6%	-13.2	21.6%	26.5%	30.5%	34.1%	-12.5	22.8%	26.6%	28.7%	34.3%	-11.5	21.8%	26.4%	29.8%	34.0%	-12.2
	行っ たこ とが ない	4.4%	5.8%	7.1%	9.8%	-5.4	4.0%	5.8%	7.4%	10.4%	-6.4	4.0%	5.4%	7.5%	10.3%	-6.3	3.7%	6.0%	7.6%	10.4%	-6.7
近隣に 図書館 がない ため行 くこと がで きない	0.9%	0.9%	1.1%	1.9%	-1.0	0.9%	0.9%	1.0%	2.0%	-1.1	0.9%	1.0%	1.1%	2.1%	-1.2	0.8%	1.1%	1.2%	1.9%	-1.1	

注1) 差の数値は、A-Dのポイント差を表す。2) 無回答・不明は除いて計算してある。3) 網掛けは10ポイント以上の差があることを示す。4) 学力層による差は、すべての分析でカイ二乗検定1%水準で有意。

5. 保護者のメディア利用

図表4-5は、保護者調査において、「あなたは、次のことをどの程度しますか」と尋ね、「よくする」と「時々する」と答えた合計の割合を示したものである。どの学力層の保護者も、9割以上が「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」と答えている。一方、「本を読む」と答えた割合は、学力A層の保護者で約6割なのに対し、

学力 D 層では 45%程度にとどまる。また、「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む」と答えた割合は、学力 A 層で約 6 割、学力 D 層で約 5 割であった。

いずれの保護者も、政治経済や社会問題に関するニュースを見ていないわけではない。関心もある。ただし、その情報源を、テレビやインターネットのみに頼るのか、これに加えて本や新聞といった活字メディアも利用するのかという、メディア利用の方法においては差がある。

図表4-5 保護者のメディア利用と学力層

	国語A					国語B					算数A					算数B				
	A層	B層	C層	D層	差A-D	A層	B層	C層	D層	差A-D	A層	B層	C層	D層	差A-D	A層	B層	C層	D層	差A-D
本を読む(本は、電子書籍は含むが、漫画や雑誌は除きます)	56.4%	53.5%	49.8%	45.6%	10.8	57.6%	52.6%	50.0%	44.8%	12.8	57.0%	52.6%	49.6%	45.5%	11.5	57.8%	52.5%	49.0%	46.2%	11.6
テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る	93.5%	92.6%	91.4%	89.8%	3.7	93.5%	92.2%	92.0%	89.9%	3.6	93.6%	92.1%	91.5%	89.8%	3.8	93.7%	92.5%	90.9%	90.1%	3.6
新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む(新聞は、電子新聞を含みます)	63.4%	60.2%	56.9%	53.0%	10.4	63.3%	59.4%	57.9%	53.8%	9.5	63.7%	59.9%	56.8%	53.0%	10.7	63.9%	59.7%	56.3%	53.6%	10.3

注1) 数値は、「よくする」と「時々する」と答えた合計の割合。ただし、差の数値は、A-Dのポイント差を表す。2) 無回答・不明は除いて計算してある。3) 網掛けは10ポイント以上の差があることを示す。4) 学力層による差は、すべての分析でカイ二乗検定1%水準で有意。

6. まとめ

保護者調査から小学生の家庭環境を見ていくと、いわゆる「早寝早起き朝ごはん」といった基本的な生活習慣や、保護者のほめ方・叱り方や、しつけや道徳面等における子供への接し方に関しては、子供の学力階層による差はそれほど大きく表れていない。ただし、これらはすべて保護者の自己認知に基づく回答なので、客観的に観察すれば違いが見いだされる可能性がある。

一方で、学力 A 層と学力 D 層の家庭で顕著な差がみられたのは、次のような家庭の文化的環境についてである。第一に、学力の高い子供、特に知識の活用力が高い子供ほど、学習習慣のみならず、読書の習慣がある。第二に、学力の高い子供の家庭ほど、保護者が子供の時間の使い方をコントロールし、計画的に勉強させるだけでなく、本や新聞等の活字文化や、外国語や外国の文化に触れる機会を意識的に作ろうとする傾向がある。第三に、「勉強や成績のこと」「将来や進路」「地域や社会の出来事やニュース」を、親からだけでなく子供からも積極的に話す関係性が、高学力層の子供の家庭の文化的特徴の一つといえる。第四に、美術館、劇場、博物館、科学館、図書館等の文化施設に子供と一緒にいく頻度はいずれの学力層でも思ったほど多くはないが、特に学力 D 層においては、美術館や劇場に「行ったことがない」割合が 2 割を超えているだけでなく、近隣で無料という意味では誰にとっても利用しやすいはずの図書館にも「ほとんど行かない」割合が約 35%と多い。第四に、いずれの保護者も政治経済や社会問題に関するニュースに関心があると思われるが、高学力の子供の家庭では、保護者自身が本や新聞といった活字メディアを頻繁に利用する割合が高まることがわかった。

第5章 学力格差の変動

—平成25年度と平成29年度の比較分析—

浜野 隆

(1) 家庭の社会経済的背景と学力の関係の変化

図表5-1, 図表5-2は, 家庭の社会経済的背景 (SES) と子供の学力 (正答率) の関係を示している。図表5-1は平成25年度調査, 図表5-2は平成29年度調査である。いずれの年度も SES が高いほど子供の学力が高いという明確な傾向が見て取れる。ただ, 25年度と29年度では問題も異なるので, これらの表だけでは, SES と学力の関係がどのように変化したのかを読み取ることはできない。

図表5-1 家庭の社会経済的背景 (SES) と子供の学力 (平成25年度調査)

	小6				中3			
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
Lowest	53.9	39.9	68.6	47.7	70.0	58.9	53.0	30.5
Lower middle	60.1	46.1	75.2	55.1	74.5	65.2	60.8	37.7
Upper middle	63.9	51.4	79.2	60.3	77.8	69.4	66.4	43.5
Highest	72.7	60.0	85.4	70.3	83.1	76.2	74.5	54.4

図表5-2 家庭の社会経済的背景 (SES) と子供の学力 (平成29年度調査)

	小6				中3			
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
Lowest	68.0	48.4	69.7	36.3	70.4	63.1	52.8	38.8
Lower middle	72.7	54.5	76.2	42.3	75.6	70.0	61.5	44.9
Upper middle	76.6	59.7	81.0	47.7	78.9	74.3	67.4	49.7
Highest	82.0	67.4	87.6	57.7	84.8	81.4	77.1	58.9

(2) 平成29年度と平成25年度の学力格差の比較：標準化回帰係数の変化

そこで, 本節では, SES スコアを独立変数, 正答率を従属変数として回帰分析を行い, その標準化回帰係数がどのように変化したのかを見ていくことにする。標準化回帰係数は, SES が1単位変化したときにどの程度学力が変化するかを表しており「SES の学力に対

する影響力」といえる。

むろん、平成 25 年度調査と 29 年度調査では母集団も調査問題も異なるため、単純に標準化回帰係数の数値を比較して SES の影響力を論じることはできない。ただ、母集団・調査問題が異なるとはいえ、同じ国の同じ学年の全国調査であるということ、また、4 年間の間に SES カテゴリー別にみた世帯年収、保護者の学歴（教育年数）の平均値に大きな変化は見られない¹⁾ことから、標準化回帰係数がどのような傾向にあるのかを見ておくことは一定の意味があると思われる。

図表 5－3 は、小 6 の結果を平成 25 年度と平成 29 年度で見たものである。25 年度のほうは国語 B の係数が最も小さく、次いで算数 A、国語 A、算数 B の順に大きくなっている。一方、29 年度のほうは国語 A が最も小さく、次いで国語 B、算数 A、算数 B の順に大きくなっている。中 3 については、25 年度、29 年度とも国語 B の係数が最も小さく、次いで国語 A、算数 B、算数 A の順に大きくなっている。小学校・中学校とも、25 年度、29 年度とも、係数は 0.2 台の後半から 0.3 台に分布しており、SES と学力の関係の強さには大きな変化はないものと推測される。

図表 5－3 SES スコアと正答率の関係（単回帰分析の標準化回帰係数値の変化）

	小 6		中 3	
	H25	H29	H25	H29
国語 A（小 6）	0.344	0.291	0.292	0.311
国語 B（小 6）	0.299	0.300	0.262	0.282
算数 A（小 6）	0.341	0.338	0.381	0.398
算数 B（小 6）	0.345	0.350	0.370	0.361

（3）学力層別の SES 構成比に注目した学力格差の変化

次に、別の角度から学力格差の変化を記述してみよう。図表 5－4～図表 5－11 は、学力層（A 層～D 層）別に見た、SES 構成比の変化を見たものである。たとえば、図表 5－4 でみると、小 6 国語 A の学力 A 層（高学力層）に限ってみると、平成 25 年度は、Lowest が 12.9%、Highest が 41.6% を占めていたが、平成 29 年度は Lowest の割合が 16.3% に上昇し、Highest の割合が 35.9% に低下している。すなわち、25 年度から 29 年度にかけての SES による学力格差の変化は、小学校国語 A についていえば、学力 A 層に占める Lowest の増加と Highest の減少によって特徴づけられる。一方、学力 D 層について見ると、25 年度と 29 年度は SES 構成比に変化はほとんど見られない。小 6 の国語 B、算数 A、算数 B については、さほど大きな変化は見られないことも読み取れる（図表 5－5 から図表 5－7）。

次に、中学校について見てみよう（図表 5－8 から図表 5－11）。中学校について見ると、いずれの教科、問題でも、学力 D 層に占める Lowest の比率が高まっていることが注目される。一方、学力 D 層に占める Highest の比率はいずれの教科、問題でも低下している。低学力層（学力 D 層）に占める Lowest の比率（%）は、国語 A では、3.8 ポイント、国語 B では 5.1 ポイント、数学 A では 4.0 ポイント、数学 B では 1.9 ポイント増えている。

また、低学力層（学力D層）に占める Highest の比率（％）に注目してみると、国語Aでは、2.1ポイント、国語Bでは3.0ポイント、数学Aでは2.5ポイント、数学Bでは1.4ポイント減少している。一方、高学力層（学力A層）のSES構成比に注目してみると、いずれの教科、問題でも、Lowest の比率が高まり、Highest の比率が低下している。

すなわち、25年度から29年度にかけて、中学校においては、Lowest SESの高学力層も低学力層も、各学力層全体に占める割合は増えている。一方、Highest SESの高学力層、低学力層は、各学力層全体に占める割合を減少させている。

上記の分析結果を総合すると、家庭の社会経済的背景の学力への影響の変化は、小学校・中学校ともに教科・問題により様々であることがわかる。現時点では、全体としては、明確な傾向を読み取ることは困難であるといえよう。

図表5-4 学力層別のSES構成比（小6，国語A）

小6，国語A			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	12.9%	20.3%	25.2%	41.6%	100.0%
		H29	16.3%	21.5%	26.3%	35.9%	100.0%
	B層	H25	20.2%	25.2%	27.5%	27.0%	100.0%
		H29	22.3%	25.7%	26.0%	26.0%	100.0%
	C層	H25	26.8%	28.0%	26.3%	18.9%	100.0%
		H29	27.9%	27.8%	25.9%	18.4%	100.0%
	D層	H25	38.3%	27.8%	22.1%	11.7%	100.0%
		H29	39.2%	29.1%	20.2%	11.5%	100.0%

図表5-5 学力層別のSES構成比（小6，国語B）

小6，国語B			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	14.5%	19.6%	26.6%	39.3%	100.0%
		H29	15.4%	20.4%	26.3%	37.9%	100.0%
	B層	H25	20.3%	27.0%	26.2%	26.5%	100.0%
		H29	22.7%	26.2%	26.6%	24.4%	100.0%
	C層	H25	27.1%	27.7%	25.5%	19.7%	100.0%
		H29	29.3%	28.7%	24.1%	17.9%	100.0%
	D層	H25	38.8%	27.7%	21.7%	11.8%	100.0%
		H29	39.2%	28.8%	20.3%	11.8%	100.0%

図表 5-6 学力層別の SES 構成比 (小6, 算数 A)

小6, 算数 A			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	13.4%	20.0%	26.8%	39.8%	100.0%
		H29	14.5%	20.7%	26.4%	38.5%	100.0%
	B層	H25	20.2%	26.6%	26.5%	26.7%	100.0%
		H29	21.1%	26.2%	27.3%	25.4%	100.0%
	C層	H25	25.3%	28.3%	26.6%	19.8%	100.0%
		H29	28.3%	28.5%	25.5%	17.7%	100.0%
	D層	H25	40.6%	28.3%	20.6%	10.5%	100.0%
		H29	42.9%	28.8%	19.1%	9.3%	100.0%

図表 5-7 学力層別の SES 構成比 (小6, 算数 B)

小6, 算数 B			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	12.7%	20.3%	25.8%	41.2%	100.0%
		H29	13.5%	19.6%	26.2%	40.6%	100.0%
	B層	H25	20.6%	26.4%	27.4%	25.7%	100.0%
		H29	21.9%	26.1%	27.4%	24.6%	100.0%
	C層	H25	28.0%	26.7%	26.0%	19.3%	100.0%
		H29	30.4%	28.9%	24.2%	16.5%	100.0%
	D層	H25	40.4%	29.0%	20.6%	10.0%	100.0%
		H29	41.5%	27.8%	19.6%	11.2%	100.0%

図表 5-8 学力層別の SES 構成比 (中3, 国語 A)

中3, 国語 A			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	13.0%	18.8%	25.8%	42.4%	100.0%
		H29	15.0%	19.4%	26.3%	39.3%	100.0%
	B層	H25	20.1%	22.6%	28.1%	29.2%	100.0%
		H29	22.7%	24.7%	27.2%	25.4%	100.0%
	C層	H25	27.7%	25.6%	26.4%	20.3%	100.0%
		H29	30.5%	26.5%	25.5%	17.5%	100.0%
	D層	H25	37.5%	27.3%	22.6%	12.7%	100.0%
		H29	41.3%	26.9%	21.2%	10.6%	100.0%

図表 5-9 学力層別の SES 構成比 (中3, 国語 B)

中3, 国語 B			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	15.3%	20.4%	26.8%	37.5%	100.0%
		H29	17.7%	21.3%	26.6%	34.4%	100.0%
	B層	H25	21.9%	21.8%	26.9%	29.5%	100.0%
		H29	25.2%	24.6%	27.1%	23.1%	100.0%
	C層	H25	25.9%	26.1%	26.0%	22.0%	100.0%
		H29	30.9%	26.8%	24.4%	17.8%	100.0%
	D層	H25	36.7%	26.1%	23.2%	14.0%	100.0%
		H29	41.8%	26.2%	21.0%	11.0%	100.0%

図表 5-10 学力層別の SES 構成比 (中3, 数学 A)

中3, 数学 A			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	10.3%	16.5%	26.4%	46.8%	100.0%
		H29	12.2%	18.0%	26.6%	43.2%	100.0%
	B層	H25	18.7%	22.9%	28.3%	30.1%	100.0%
		H29	20.8%	25.1%	27.8%	26.3%	100.0%
	C層	H25	26.3%	26.2%	28.0%	19.5%	100.0%
		H29	28.9%	26.9%	26.8%	17.4%	100.0%
	D層	H25	41.3%	27.9%	20.1%	10.7%	100.0%
		H29	45.3%	26.9%	19.5%	8.2%	100.0%

図表 5-11 学力層別の SES 構成比 (中3, 数学 B)

中3, 数学 B			家庭の社会経済的背景				合計
			Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
学力層	A層	H25	11.1%	17.1%	26.2%	45.6%	100.0%
		H29	12.7%	18.6%	26.3%	42.4%	100.0%
	B層	H25	20.7%	24.6%	28.6%	26.1%	100.0%
		H29	22.4%	24.8%	27.6%	25.3%	100.0%
	C層	H25	31.4%	26.5%	25.2%	17.0%	100.0%
		H29	32.7%	26.8%	24.8%	15.7%	100.0%
	D層	H25	40.1%	26.7%	21.3%	11.9%	100.0%
		H29	42.0%	26.6%	20.8%	10.5%	100.0%

＜注＞

1) 平成 25 年度と平成 29 年度の SES カテゴリ別にみた世帯年収，保護者の学歴（教育年数）の平均値は次のように変化している。図表 5-12 は小学校，図表 5-13 は，中学校のデータである。

図表 5-12 SES カテゴリ別にみた各指標の平均値（小学校）

		Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest
世帯年収 (円)	H25	3,477,810	4,961,449	6,401,696	9,185,851
	H29	3,806,385	5,335,503	6,752,208	9,722,792
父学歴 (教育年数)	H25	11.32	12.60	14.21	15.97
	H29	11.46	12.77	14.36	16.07
母学歴 (教育年数)	H25	11.66	12.94	13.61	14.93
	H29	11.66	13.17	13.84	15.11

図表 5-13 SES カテゴリ別にみた各指標の平均値（中学校）

		Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest
世帯年収 (円)	H25	3,368,024	5,117,369	6,460,371	9,281,548
	H29	3,544,766	5,324,631	6,827,895	9,395,954
父学歴 (教育年数)	H25	11.29	12.52	14.04	15.75
	H29	11.27	12.46	14.01	15.88
母学歴 (教育年数)	H25	11.63	12.74	13.43	14.65
	H29	11.58	12.85	13.55	14.82

第6章 大都市において経済的不利を克服している家庭の特徴

浜野 隆

(1) はじめに

これまでの章で明らかにされているように、家庭の経済状況と子供の学力との間には極めて強い相関がある。しかしながら、家庭の経済的不利がありながらも高い学力を達成している子供は一定数存在する。それらの子供の家庭がどのような特徴を持っているのかを明らかにすることは、学力格差の緩和策を考える上で参考になると思われる。

家庭の経済状況と子供の学力の関係が特に強いのは、都市部においてである。世帯年収と算数B正答率との相関係数を見ると、大都市では0.283、中核市では0.241、その他の市では0.218、町村部では0.172である。他の教育段階、教科、問題で見ても、大都市において世帯年収と学力の関係が強くなる傾向は変わらない。この傾向に関する一つの解釈としては、大都市では塾等の学校外教育機関が多く、家庭の経済面での豊かさが学力の獲得において有利に働きやすい、ということが考えられる。

では、このような大都市にあっても、経済的不利にあっても、子供が高い学力を達成している家庭は、どのような特徴を持っているのだろうか。ここでは、家庭の所得との相関が最も高い「算数B」の学力について見ていくことにする。年収300万円までの世帯（大都市全体の約11%）で、高学力を達成している児童（学力A層）の家庭がどのような特徴があるのか、親はどのような働きかけを子供にしているのか、保護者調査をもとに見ていくことにする。大都市の特徴を明確にするため、大都市の傾向と全体の傾向とを比較して見ていくことにしたい。

(2) 子供に対する親の働きかけ

図表6-1は、年収300万円未満世帯について、学力層別に保護者がどのような（子供への）働きかけをしているかを見たものである。これを見ると、学力A層全体では次のような家庭が相対的に多いことがわかる：「子供が決まった時刻に起きるよう（起こすよう）にしている」「毎日子供に朝食を食べさせている」「テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間等のルールを決めている」「テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をする時間を限定している」「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている」「子供に本や新聞を読むようにすすめている」「子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている」「子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「子供と何のために勉強するかについて話している」「計画的に勉強するよう子供に促している」「子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している」。

図表6-1 子供に対する親の働きかけと学力層（算数B）の関係（「あてはまる」の割合[%]）

	世帯年収300万円未満（大都市）				世帯年収300万円未満（全体）			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
子供が決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている	64.5	68.8	60.3	61.8	67.1	65.3	62.9	62.2
子供を決まった時刻に寝かせるようにしている	36.6	39.2	30.8	36.6	35.4	34.5	33.8	37.1
毎日子供に朝食を食べさせている	82.7	80.0	74.9	65.4	84.1	79.6	77.4	71.6
テレビ・ビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間等のルールを決めている	23.2	21.7	17.2	16.8	21.4	18.2	17.5	18.5
テレビゲームをする時間を限定している	28.2	23.5	21.3	21.0	25.1	21.7	18.9	21.4
携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている	29.4	33.2	30.7	25.1	25.0	26.5	26.4	26.2
子供のよいところをほめる等して自信を持たせるようにしている	38.0	38.1	30.6	27.8	32.3	31.8	31.4	32.1
子供が悪いことをしたらきちんと叱っている	74.8	77.5	77.8	75.9	76.2	74.6	77.7	74.5
子供に本や新聞を読むようにすすめている	33.1	23.4	19.7	17.0	28.5	22.7	18.4	17.2
子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている	16.1	10.0	7.1	6.6	11.6	8.8	8.0	7.8
子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした	48.2	41.3	34.7	32.4	43.4	38.8	35.1	31.6
子供と何のために勉強するかについて話している	36.3	29.1	27.2	27.2	31.8	26.0	24.9	28.0
計画的に勉強するよう子供に促している	33.1	27.8	21.6	20.1	29.6	24.2	21.3	20.3
子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している	21.3	15.6	13.1	13.9	16.7	14.5	11.8	12.9
子供に努力することの大切さを伝えている	43.2	45.1	40.5	43.5	44.4	40.3	40.4	42.0
子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている	47.6	50.4	44.1	49.7	48.1	45.4	44.5	48.2
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと家庭で話し合っている	61.2	65.1	65.6	67.7	63.6	63.7	66.4	69.2
地域社会等でのボランティア活動等に参加するよう子供に促している	14.1	8.6	9.6	11.8	12.3	10.6	12.0	12.8

学力A層と学力D層の差を大都市と全体で比較してみると、大都市の学力A層のほうがより次のような傾向が顕著である：「毎日子供に朝食を食べさせている」「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている」「子供に本や新聞を読むようにすすめている」「子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている」「子供と何のために勉強するかについて話している」。また、「子供のよいところをほめる等して自信を持たせるようにしている」については、全体では学力A層から学力D層でほとんど差は見られないが、大都市に限ってみると、学力A層、学力B層で割合が高くなっている。

図表6-2 子供と一緒に外出と学力(算数B)の関係(「1年に1回程度」以上の割合[%])

	世帯年収300万円未満(大都市)				世帯年収300万円未満(全体)			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
子供と一緒に美術館や劇場に行く	37.5	29.0	25.4	24.0	29.5	24.4	23.1	22.0
子供と一緒に博物館や科学館に行く	46.3	30.7	31.0	26.8	32.9	27.3	26.7	22.4
子供と一緒に図書館に行く	61.6	42.6	41.7	29.9	60.2	49.8	47.5	39.4

(3) 子供と一緒に外出

図表6-2は、年収300万円未満世帯について、学力層別に保護者が子供と一緒に美術館や博物館、図書館等にどれくらいの頻度で外出するかを見たものである。これを見ると、大都市の学力A層は、全体の学力A層に比べ、美術館や劇場、博物館や科学館、図書館に行く傾向が顕著であることが見て取れる。学力A層と学力D層の差を大都市と全体で比較してみると、大都市の学力A層のほうがより美術館や劇場、博物館や科学館、図書館等を積極的に利用していることがわかる。

(4) 保護者の意識や行動

図表6-3は、年収300万円未満世帯の児童について、学力層別に保護者の意識や行動を見たものである。これを見ると、全体でも大都市でも、学力A層では次のような保護者の行動が相対的に多いことがわかる：「授業参観や運動会等の学校行事への参加」

「PTA活動や保護者会等への参加」「学校支援、放課後学習支援、土曜学習支援等、地域と学校の連携・協働に関わる活動へのボランティアとしての参加」「自治会・子供会・子供と一緒に行う体験活動(生活・文化体験、自然体験、社会体験)等の地域活動への参加」「地域の行事に子供と一緒に参加する」「本を読む(本は、電子書籍は含むが、漫画や雑誌は除く)」「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む(新聞は、電子新聞を含む)」「地域には、ボランティアで学校を支援する等、地域の子供たちの教育に関わってくれる人が多いと思う」「地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がある」。

図表 6-3 保護者の行動と子供の学力層（算数B）の関係（「よくする」の割合[%]）

	世帯年収300万円未満（大都市）				世帯年収300万円未満（全体）			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
授業参観や運動会等の学校行事への参加	73.5	64.9	63.1	63.9	76.1	71.2	71.8	68.1
PTA 活動や保護者会等への参加	28.9	24.3	21.9	25.6	34.5	29.4	26.4	29.0
学校支援，放課後学習支援，土曜学習支援等，地域と学校の連携・協働に関わる活動へのボランティアとしての参加	8.1	4.2	6.1	3.3	5.8	5.3	6.0	4.5
自治会・子供会・子供と一緒にを行う体験活動（生活・文化体験，自然体験，社会体験）等の地域活動への参加	17.1	9.7	12.2	11.1	20.1	16.0	15.2	14.5
地域の行事に子供と一緒に参加する	16.7	12.6	12.4	10.2	18.5	16.4	15.4	14.8
本を読む（本は，電子書籍は含むが，漫画や雑誌は除く）	23.5	14.2	11.5	17.2	16.1	14.7	12.7	12.1
テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る	63.6	54.1	56.5	54.9	53.5	48.8	50.7	50.2
新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む（新聞は，電子新聞を含む）	25.7	20.3	17.2	16.7	22.3	18.3	17.4	18.8
地域には，ボランティアで学校を支援する等，地域の子供たちの教育に関わってくれる人が多い（*）	32.9	20.8	22.8	19.7	22.9	20.9	20.2	20.5
地域や社会で起こっている問題や課題，出来事に関心がある（**）	38.6	33.1	31.6	28.7	34.5	30.3	29.9	28.5

（*）「そう思う」の割合 （**）「関心がある」の割合

学力A層と学力D層の差を大都市と全体で比較してみると，大都市の学力A層のほうがより次のような傾向が顕著である：「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む（新聞は，電子新聞を含む）」「地域には，ボランティアで学校を支援する等，地域の子供たちの教育に関わってくれる人が多いと思う」「地域や社会で起こっている問題や課題，出来事に関心がある」。

（5）家庭の蔵書数・子供向けの本の数

図表 6-4・図表 6-5 は，年収 300 万円未満世帯について，学力層別に家庭の蔵書数・

子供向けの本の数を見たものである。これを見ると、全体でも大都市でも学力 A 層では、蔵書数、子供向けの本の数とも、多いことが見て取れる。

学力 A 層と学力 D 層の差を大都市と全体で比較してみると、家庭の蔵書数に関しては大都市の学力 A 層のほうが「0～10冊」の割合が少なく、「101冊～200冊」の割合が多い。また、子供向けの本の数については、大都市の学力 A 層のほうが「101冊以上」が多くなっている。

図表 6 - 4 家庭の蔵書数と子供の学力層（算数 B）の関係

	世帯年収300万円未満（大都市）				世帯年収300万円未満（全体）			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
0～10冊	20.8	30.9	41.9	42.4	32.3	37.6	43.9	48.9
11～25冊	23.3	29.5	22.7	26.8	22.6	24.4	23.6	25.0
26～100冊	34.6	28.2	25.3	24.9	31.7	27.0	24.7	20.0
101冊～200冊	14.8	6.1	6.0	4.5	7.9	5.9	4.7	3.9
201冊～500冊	3.4	2.2	2.9	1.0	4.2	3.7	2.1	1.7
501冊以上	3.1	3.1	1.1	0.4	1.4	1.4	1.1	0.5
全体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表 6 - 5 家庭にある子供向けの本の数と学力層（算数 B）の関係

	世帯年収300万円未満（大都市）				世帯年収300万円未満（全体）			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
0～10冊	23.7	31.5	42.4	44.3	29.4	35.4	41.0	50.3
11～25冊	24.5	30.7	29.2	27.3	27.7	28.8	28.9	26.9
26～50冊	28.9	21.4	17.1	20.7	23.3	22.4	20.0	15.6
51冊～100冊	14.1	12.4	7.9	5.9	13.8	9.9	7.5	5.2
101冊以上	8.7	4.0	3.4	1.8	5.8	3.5	2.7	2.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第7章 不利な環境を克服している児童生徒の特徴

山田 哲也

(1) はじめに

本章では、保護者の「社会経済的背景」（以下、SES）を基準に、「特に困難を抱える」と思われる児童生徒に着目し、レジリエンス（resilience：柔軟さ・回復力）という観点から、厳しい環境のなかでも困難の乗り越えに一定程度成功した児童生徒やその保護者に見られる特徴について検討する。

この章の鍵概念となる「レジリエンス」とは、逆境に直面した人びとが、直面する困難にうまく対処し、その乗り切りを可能にする条件を把握するために用いられるものである。レジリエンス研究は心理学分野を中心にかなりの蓄積があるが、論者によってその強調点は様々で、大きく分けると①困難の乗り切りを可能にする性格的特性に着目した定義と、②環境とそこでの危険要因と個人的要因の相互作用過程やその結果を強調する定義が併存する状況にある（齊藤・岡安 2009）。

先に述べたように、レジリエンス概念は心理学的な研究で用いられることが多いが、このキーワードににあえて着目する理由は、①保護者の社会経済的背景に起因する様々な困難を乗り越える際に、代替的な資源を用いる等、厳しい状況にある子供や家族が行う創意工夫の独自性を把握しつつ、②逆境に立ち向かう力を個人の内面だけに還元せず、こうした力の発揮を可能にする社会的な条件を明らかにしたいからである。

子供の貧困をテーマとしたこれまでの研究は、学力や学歴を媒介に貧困が世代間再生産されてゆく実態を一定程度明らかにしてきた。他方で、社会経済的に厳しい状況にある人びとが代替的な資源をどう活用し、様々な困難をいかに乗り越えようとしているのか、また、そこで一定程度「うまくいった」場合に、それを可能にした条件は何かを明らかにしてゆく作業は、困難の実態解明に比べると相対的に手薄で、いまだ展開の途上にあるといえよう。

この章では、全国規模のサンプルを用いた検討を通じて、学力獲得という観点から、社会経済的な背景に起因する様々な困難を乗り越える条件を探りたい。ただし、以下で行う検討は記述統計を用いた探索的なもので、レジリエンスの規定要因を明らかにするための予備的・基礎的な作業である点にご留意いただきたい。

(2) 分析に用いる変数

1 「特に困難を抱える」児童生徒とレジリエンスを発揮した事例を選定する基準

この章ではPISAにおける定義¹⁾を参考に、①保護者のSESがLowestに区分されている子供を「特に困難を抱える」児童生徒と捉え、②かれらのうち、国語・算数（国語・数学）のA・B問題すべての正答数を合算して算出した「総正答率」（総正答数÷総問題数）で上位25%（学力A層）に位置する子供を「Resilient students」、それ以外の学力水準にあるLowestの子供たちを「Non-resilient students」と定義する。

SESは経済状況と学歴の両面から家庭が保持する諸資源を把握できる指標で、Lowest～Highestの4区分は本報告書で使用する基本的なカテゴリであることを考慮して、本章では上記の基準を用いたが、第1章で見たように、Lowest SESの平均収入は約350万円（小学校）・約380万（中学校）と、第6章で用いた経済状況に関する基準より高めであることに留意する必要がある。

以下の分析では、保護者質問紙調査、児童・生徒質問紙調査から得られたデータのうち、a) 保護者の子供への関与、b) 子供自身の性格的特性（とりわけ「非認知スキル」に関するもの）、c) 子供の生活や学習の実態に着目し、Resilient studentsとNon-resilient studentsの間で特に違いがみられた項目について検討する。

また、Resilient studentsとNon-resilient studentsの両者を比較する際に、Resilient studentsがいかなる代替的な資源を活用して高い学力水準に達しているのかをみるために、同じ上位25%に位置し、SESが相対的に高いグループ（Upper Middle以上の学力A層）もあわせて参照する。小学校のResilient studentsは、Lowestに区分されるグループの10.6%（児童全体の2.6%）、中学校のResilient studentsの割合はLowestに区分されるグループの9.7%（生徒全体の2.5%）で、「特に困難を抱える」児童生徒でレジリエンスを発揮していると判定されたケースは小中いずれも約1割である。

2 比較の対象となる質問群

以下の分析で比較する質問群は、図表7-1・図表7-2で示す通りである（次頁）。保護者質問紙・児童生徒質問紙のうち、レジリエンスに関連すると思われる項目をなるべく網羅的に選択した。

保護者質問紙では、子供に対する親の働きかけ（Q3）、社会教育施設の利用頻度（Q4）、日常会話（Q5）、教育期待（Q7）、習い事（Q11）、学校行事や地域活動への参加（Q14・15）、蔵書数と保護者の収入・属性（Q18）について検討を加えた。

児童生徒質問紙では、保護者質問紙ですでに把握したものについては省略し、主に子供自身の性格特性や行動に関する設問をピックアップした。具体的には、「非認知スキル」に関わる項目（Q2・Q7の一部）、生活時間や通塾等の実態（Q3）、放課後・土曜日の過ごし方（Q4）、学習スタイル（Q6）について検討を加えた。

それぞれの項目について、Resilient studentsとNon-resilient studentsの間に5%ポイント以上の差があったものについては下線を引き、小学校で差が認められた場合には「○」、

中学校では「●」をつけて区別している。次節からは下線のある項目を中心に（一部は紙幅の都合で割愛するが），両者に見られる違いを確認していきたい。

以下で検討するのは，あくまでもレジリエンスを発揮した子供とそうでない子供との間に認められる差異であり，両者の違いが必ずしも因果関係を示すものではない点に留意する必要がある。また，今回は他の変数を統制せずに二つの変数間の関連性を検討しており，ここで確認された違いは，別な媒介変数によって生じている可能性があることも付言しておきたい。

図表 7-1 保護者質問紙調査で比較した質問項目

<p>子供に対する親の働きかけ(Q3)</p> <p>子供が決まった時刻に起きよう(起こすよう)にしている ●</p> <p>子供を決まった時刻に寝かせるようにしている</p> <p>毎日子供に朝食を食べさせている ○●</p> <p>テレビ・ビデオ・DVDを見たり，聞いたりする時間などのルールを決めている</p> <p>テレビゲームをする時間を限定している</p> <p>携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている</p> <p>子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている ●</p> <p>子供が悪いことをしたらきちんと叱っている</p> <p>子供に本や新聞を読むようにすすめている ○●</p> <p>子供が読んだ本の感想を話し合ったりしている ○●</p> <p>子供が小さいころ，絵本の読み聞かせをした ○●</p> <p>子供と何のために勉強するかについて話している ●</p> <p>計画的に勉強するよう子供に促している ○●</p> <p>子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している ●</p> <p>子供に努力することの大切さを伝えている</p> <p>子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている</p> <p>いじめは，どんな理由があってもいけなくことだと家庭で話し合っている</p> <p>地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう子供に促している</p> <p>子供と一緒に外出:社会教育施設の利用頻度(Q4)</p> <p>子供と一緒に美術館や劇場に行く ○●</p> <p>子供と一緒に博物館や科学館に行く ●</p> <p>子供と一緒に図書館に行く ○●</p> <p>子供との日常会話(Q5)</p> <p>学校での出来事や友だちのことについて話をする(子供から)</p> <p>学校での出来事や友だちのことについて話をする(保護者から)</p> <p>勉強や成績のことについて話をする(子供から) ○●</p> <p>勉強や成績のことについて話をする(保護者から) ○●</p> <p>将来や進路について話をする(子供から) ●</p> <p>将来や進路について話をする(保護者から)</p> <p>地域や社会の出来事やニュースについて話をする(子供から) ○</p> <p>地域や社会の出来事やニュースについて話をする(保護者から)</p> <p>子供の心配事や悩み事の相談によく乗っている</p>	<p>子供の教育に対する期待(Q7)</p> <p>あなたは，お子さんどの段階の学校まで進んでほしいと思っていますか ○●</p> <p>子供の習い事について(Q11)</p> <p>学習塾</p> <p>芸術文化活動に関する習い事 ○●</p> <p>スポーツ活動に関する習い事 ●</p> <p>英語に関する習い事 ○●</p> <p>学校や地域連携・体験活動への参加(Q14)</p> <p>授業参観や運動会などの学校行事への参加 ●</p> <p>PTA活動や保護者会などへの参加 ○●</p> <p>地域と学校の連携・協働に関わる活動への参加</p> <p>自治会・子供会・お友達と一緒に体験活動などの地域活動への参加</p> <p>地域との関わり(Q15)</p> <p>地域の行事に子供と一緒に参加している</p> <p>地域には地域の子どもたちの教育に関わってくれる人が多い</p> <p>家族のことについて(Q18)</p> <p>家にある本の数(子供向けの本を除く) ○●</p> <p>家にある本の数(子供向けの本のみ) ○●</p> <p>父親(または父親に代わる方)の現在の仕事[雇用形態]</p> <p>父親(または父親に代わる方)の現在の主な仕事[職業分類]</p> <p>父親(または父親に代わる方)の普段の帰宅時間</p> <p>母親(または母親に代わる方)の現在の仕事[雇用形態]</p> <p>母親(または母親に代わる方)の現在の主な仕事[職業分類] ○●</p> <p>母親(または母親に代わる方)の普段の帰宅時間</p> <p>家族全体の世帯年収(税込) ○●</p> <p>父親(または父親に代わる方)の最終学歴 ○●</p> <p>母親(または母親に代わる方)の最終学歴 ○●</p> <p>下線のある質問は，Resilient studentsとNon-resilient studentsで5%ポイント以上の差がみられるセルがあった項目。○は小学校，●は中学校で5%ポイント以上の差がみられたことを表す。</p>
---	--

図表 7-2 児童生徒質問紙調査で比較した質問項目

<p>非認知的スキルに関わる項目(Q2・Q7の一部)</p> <p>ものごとを最後までやり遂げて，うれしかったことがある ○●</p> <p>難しいことでも，失敗を恐れなくて挑戦している ○</p> <p>自分には，よいところがあると思う ○</p> <p>友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ ○●</p> <p>友達と話し合うとき，友達の話を最後まで聞くことができる ○</p> <p>友達と話し合うとき，友達の考えを受け止めて，自分の考えを持つことができる ○●</p> <p>学級会などの話し合いの活動で，自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり，折り合いをつけたりして話し合い，意見をまとめている ○● *Q7</p> <p>学級みんなで協力して何かをやり遂げ，うれしかったことがある ○● *Q7</p> <p>生活時間・通塾等の実態(Q3) *「普段」は月～金曜日の意味する</p> <p>普段，1日当たりどれくらいの時間，テレビやビデオ・DVDを見たり，聞いたりしますか ○●</p> <p>普段，1日当たりどれくらいの時間，テレビゲームをしますか ○●</p> <p>普段，1日当たりどれくらいの時間，携帯電話やスマートフォンで通話やメール，インターネットをしますか ○●</p> <p>学校の授業時間以外に，普段，1日当たりどれくらいの時間，勉強をしますか ○●</p> <p>土曜日や日曜日など学校が休みの日に，1日当たりどれくらいの時間，勉強をしますか ○●</p> <p>学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか ○●</p> <p>学校の授業時間以外に，普段，1日当たりどれくらいの時間，読書をしますか ○●</p> <p>休みや放課後，学校が休みの日に，学校図書館・学校図書室や地域の図書館にどれくらい行きますか ○●</p> <p>学校の部活動に参加していますか(生徒調査のみ) ●</p> <p>普段，1日あたりどのくらいの時間，部活動をしますか(生徒調査のみ) ●</p> <p>放課後の過ごし方(Q4)</p> <p>家で勉強や読書をしている ○●</p> <p>放課後子供教室や放課後児童クラブ(学童保育)に参加している(児童調査のみ)</p> <p>学校の部活動に参加している(生徒調査のみ) ●</p> <p>地域の活動に参加している</p> <p>学習塾など学校や家以外の場所で勉強している ●</p> <p>習い事(スポーツ除く)をしている ○</p> <p>スポーツをしている</p> <p>家でテレビやビデオ・DVDをみたり，ゲームをしたり，インターネットをしたりしている</p> <p>家族と過ごしている</p> <p>友達と遊んでいる ○●</p>	<p>土曜日の午前過ごし方(Q4)</p> <p>学校で授業を受けている</p> <p>学校の部活動に参加している(生徒調査のみ) ●</p> <p>家で勉強や読書をしている ○●</p> <p>学習塾など学校や家以外の場所で勉強している</p> <p>習い事(スポーツ除く)をしている</p> <p>スポーツをしている</p> <p>地域の活動に参加している</p> <p>家でテレビやビデオ・DVDをみたり，ゲームをしたり，インターネットをしたりしている</p> <p>家族と過ごしている</p> <p>友達と遊んでいる ○●</p> <p>土曜日の午後過ごし方(Q4)</p> <p>学校で授業を受けている</p> <p>学校の部活動に参加している(生徒調査のみ)</p> <p>家で勉強や読書をしている ○●</p> <p>学習塾など学校や家以外の場所で勉強している ●</p> <p>習い事(スポーツ除く)をしている</p> <p>スポーツをしている</p> <p>地域の活動に参加している</p> <p>家でテレビやビデオ・DVDをみたり，ゲームをしたり，インターネットをしたりしている ○●</p> <p>家族と過ごしている ○●</p> <p>友達と遊んでいる ●</p> <p>学習スタイル(Q6)</p> <p>自分で計画を立てて勉強している ○●</p> <p>学校の宿題をしている ○●</p> <p>学校の授業の予習をしている ○</p> <p>学校の授業の復習をしている ○●</p> <p>下線のある質問は，Resilient studentsとNon-resilient studentsで5%ポイント以上の差がみられるセルがあった項目。○は小学校，●は中学校で5%ポイント以上の差がみられたことを表す。</p>
--	---

(3) 保護者質問紙調査データにみられる差異

1 子供に対する関与について

図表7-3・図表7-4は、子供に対するかかわり方で違いがみられた項目の結果をまとめたものである。Resilient studentsとNon-resilient studentsで5%ポイント以上の差がみられたセルに網掛けをしている(以下同様)。

図表7-3 子供のレジリエンス×保護者の関与(小学校)

		あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない
毎日子供に朝食を食べさせている	Resilient students	86.6%	9.4%	3.0%	1.0%
	Non-resilient students	78.9%	14.5%	5.3%	1.3%
	A層(Upper middle以上)	94.5%	4.6%	0.7%	0.2%
	合計	85.7%	10.2%	3.3%	0.9%
子供に本や新聞を読むようにすすめている	Resilient students	25.5%	35.6%	30.2%	8.6%
	Non-resilient students	16.2%	33.3%	37.7%	12.8%
	A層(Upper middle以上)	46.0%	37.3%	14.0%	2.7%
	合計	28.7%	35.1%	27.7%	8.5%
子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている	Resilient students	9.7%	23.7%	47.6%	18.9%
	Non-resilient students	5.5%	22.1%	46.5%	25.9%
	A層(Upper middle以上)	17.2%	34.9%	37.4%	10.5%
	合計	10.4%	27.4%	42.9%	19.3%
子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした	Resilient students	39.9%	35.0%	20.1%	5.1%
	Non-resilient students	30.3%	36.4%	25.6%	7.8%
	A層(Upper middle以上)	59.1%	28.5%	10.5%	1.9%
	合計	42.5%	33.1%	19.2%	5.3%
計画的に勉強するよう子供に促している	Resilient students	28.1%	44.9%	21.2%	5.7%
	Non-resilient students	19.5%	47.9%	26.3%	6.3%
	A層(Upper middle以上)	47.6%	40.6%	9.9%	1.9%
	合計	31.3%	44.8%	19.4%	4.5%

図表7-4 子供のレジリエンス×保護者の関与(中学校)

		あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない
子供が決まった時刻に起きよう(起こすよう)にしている	Resilient students	65.8%	28.7%	3.6%	2.0%
	Non-resilient students	60.2%	31.7%	5.3%	2.8%
	A層(Upper middle以上)	66.1%	28.9%	3.3%	1.6%
	合計	62.8%	30.4%	4.4%	2.3%
毎日子供に朝食を食べさせている	Resilient students	85.2%	10.6%	3.0%	1.2%
	Non-resilient students	73.2%	16.4%	7.7%	2.7%
	A層(Upper middle以上)	90.4%	7.1%	1.9%	0.6%
	合計	80.6%	12.4%	5.1%	1.8%
子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている	Resilient students	30.2%	55.7%	13.1%	1.0%
	Non-resilient students	24.4%	57.2%	16.8%	1.5%
	A層(Upper middle以上)	33.0%	55.3%	11.2%	0.5%
	合計	28.1%	56.4%	14.4%	1.1%
子供に本や新聞を読むようにすすめている	Resilient students	20.1%	35.3%	35.0%	9.7%
	Non-resilient students	12.5%	31.4%	40.9%	15.2%
	A層(Upper middle以上)	33.2%	40.1%	21.4%	5.3%
	合計	21.0%	35.0%	33.0%	11.0%
子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている	Resilient students	8.0%	24.2%	43.0%	24.8%
	Non-resilient students	5.2%	17.2%	44.7%	32.9%
	A層(Upper middle以上)	12.8%	30.3%	38.8%	18.2%
	合計	8.3%	22.7%	42.3%	26.7%
子供が小さいころ、絵本の読み聞かせをした	Resilient students	39.1%	36.5%	19.5%	4.9%
	Non-resilient students	31.1%	36.2%	25.3%	7.4%
	A層(Upper middle以上)	58.4%	27.6%	11.4%	2.6%
	合計	42.2%	32.9%	19.5%	5.4%
子供と何のために勉強するかについて話している	Resilient students	31.0%	44.4%	19.3%	5.2%
	Non-resilient students	24.7%	45.7%	23.3%	6.3%
	A層(Upper middle以上)	40.1%	44.2%	13.3%	2.4%
	合計	31.1%	45.0%	19.2%	4.7%
計画的に勉強するよう子供に促している	Resilient students	28.1%	46.7%	19.9%	5.3%
	Non-resilient students	21.4%	48.0%	23.8%	6.9%
	A層(Upper middle以上)	40.6%	45.1%	11.3%	3.0%
	合計	29.3%	46.8%	18.7%	5.2%
子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している	Resilient students	12.3%	26.5%	43.1%	18.1%
	Non-resilient students	7.8%	18.6%	47.7%	25.9%
	A層(Upper middle以上)	21.3%	30.3%	38.3%	10.1%
	合計	13.4%	23.6%	43.7%	19.3%

中学校では小学校よりも違いが見られた設問が多いが、いずれの学校段階でも、**Resilient students**の保護者は、**Non-resilient students**と比較して子供に積極的に関与している。規則的な生活習慣を整え、文字に親しむように促す姿勢、知的な好奇心を高めるような働きかけが特徴的で、計画的に勉強するように促す等、具体的な学習行動につながるように関与する姿勢もより積極的である。

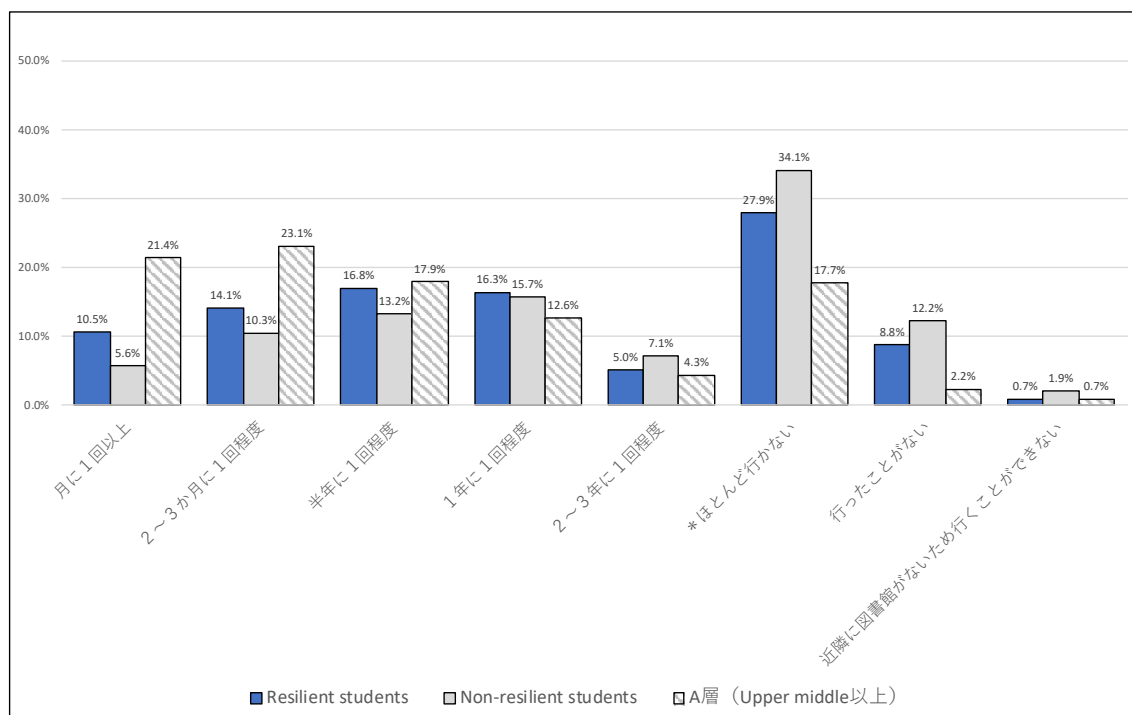
他方で、**Upper middle**以上の「学力A層」の保護者の結果をしてみると、どの項目においても、**Resilient students**の保護者よりも子供に関与する傾向が顕著である。後述するように、いくつかの例外を除くと以下に述べる他の項目についても同様の結果が認められており、経済的・文化的な資源が相対的に少ない状況のなかで、比較的ゆとりのある層になるべく近い子育て環境を整える姿勢が**Resilient students**の保護者の回答から窺える。

2 社会教育施設の利用頻度

美術館、博物館、図書館等、いわゆる社会教育施設の利用頻度については、小学校2項目、中学校3項目（すべての質問項目）で、**Resilient students**ほど利用頻度が高い傾向が認められた。図表7-5・7-6（次頁）は、そのなかでも利用頻度が相対的に高い図書館の結果を示したものである（他の施設も同様の結果だったが省略する）。

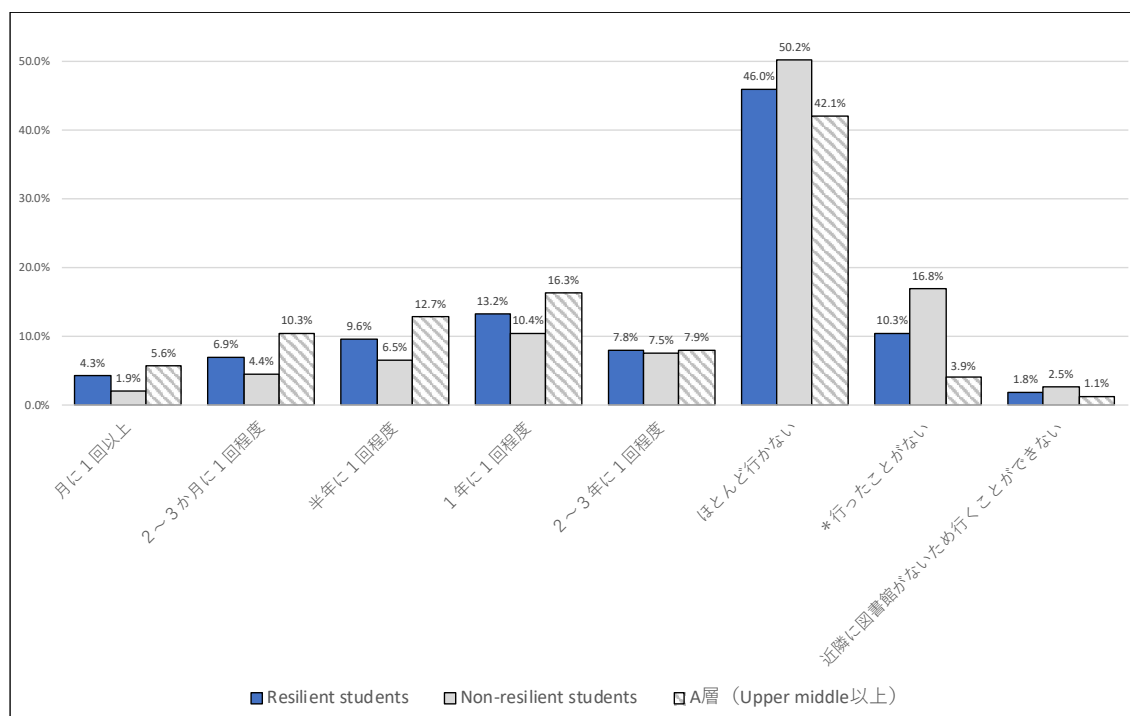
Resilient studentsは「ほとんど行かない」（小学校）、「行ったことがない」（中学校）と答える割合が少なく、利用頻度も高めに分布しているが、**Upper middle**以上の「学力A層」と比べると頻度が低い傾向がみられる。

図表7-5 子供のレジリエンス×図書館利用頻度（小学校）



*のついた項目は**Resilient students**と**Non-resilient students**で5%ポイント以上の差があるもの

図表 7-6 子供のレジリエンス×図書館利用頻度（中学校）



*のついた項目はResilient studentsとNon-resilient studentsで5%ポイント以上の差があるもの

3 子供との会話の様子

子供との会話の内容で、Resilient studentsの保護者に特徴的なのは、勉強や成績について話をする割合が高い点にある（図表 7-7・図表 7-8：次頁）。これはそもそも子供が高学力層に位置するため、学業に関する話題が選好されている可能性が高い。小学校では保護者のほうから「地域や社会の出来事やニュース」について話す傾向が強く、中学校では子供から「進路や将来についての話をする」傾向が見られた（この傾向も成績の良さに起因しているように思われる）。これまで検討した項目と比べると、Upper middle以上の「学力A層」とResilient studentsの差異は大きくない。

図表 7-7 子供のレジリエンス×会話の内容（小学校）

		あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない
勉強や成績のことについて話をする(子供から)	Resilient students	40.5%	39.3%	17.9%	2.4%
	Non-resilient students	29.3%	41.3%	24.9%	4.5%
	A層 (Upper middle以上)	43.7%	38.9%	15.7%	1.8%
	合計	35.8%	40.2%	20.7%	3.3%
勉強や成績のことについて話をする(保護者から)	Resilient students	37.8%	44.1%	15.9%	2.3%
	Non-resilient students	31.9%	49.6%	16.6%	1.9%
	A層 (Upper middle以上)	44.7%	43.1%	11.4%	0.8%
	合計	37.4%	46.6%	14.5%	1.5%
地域や社会の出来事やニュースについて話をする(子供から)	Resilient students	27.0%	41.1%	26.0%	5.8%
	Non-resilient students	19.6%	43.8%	29.6%	7.0%
	A層 (Upper middle以上)	30.4%	44.5%	22.4%	2.7%
	合計	24.4%	43.9%	26.5%	5.2%

図表 7-8 子供のレジリエンス×会話の内容 (中学校)

		あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない
勉強や成績のことに話をする(子供から)	Resilient students	43.6%	38.6%	15.8%	2.0%
	Non-resilient students	28.7%	39.7%	25.3%	6.2%
	A層(Upper middle以上)	42.1%	38.3%	17.2%	2.4%
	合計	34.8%	39.1%	21.6%	4.5%
勉強や成績のことに話をする(保護者から)	Resilient students	44.3%	44.2%	10.5%	1.0%
	Non-resilient students	38.8%	48.9%	10.8%	1.6%
	A層(Upper middle以上)	47.5%	43.9%	7.9%	0.7%
	合計	42.5%	46.7%	9.6%	1.2%
将来や進路についての話を(子供から)	Resilient students	33.7%	40.3%	22.2%	3.8%
	Non-resilient students	27.1%	40.4%	26.3%	6.3%
	A層(Upper middle以上)	30.2%	41.1%	24.4%	4.3%
	合計	28.7%	40.7%	25.3%	5.3%

4 子供の進学に対する期待

図表 7-9・図表 7-10は進学期待を比較したものである。小学校・中学校の両方で、Resilient studentsの保護者は大学進学を期待する割合が高い。中学校段階になるとこの差が一層拡大し、Non-resilient studentsの保護者は「大学まで」と答える割合が低くなり「高等学校・高等専修学校まで」「専門学校まで」と回答する割合が高まる。

この項目はResilient students とUpper middle以上の「学力A層」の違いが非常に大きく、ゆとりある層では大学進学が事実上の「標準」とされていることが分かる(小学校で83.7%・中学校で86.2%の保護者が「大学まで」を選択している)。進学期待は子供の学力水準の違いによっても生まれるが、家庭的背景による影響が大きいことをうかがわせる結果になっている。

図表 7-9 子供のレジリエンス×進学期待 (小学校)

		中学校まで	高等学校・高等専修学校まで	専門学校まで	短期大学・高等専門学校まで	大学まで	大学院まで	その他	分からない
あなたは、お子さんにどの段階の学校まで進んでほしいと思いますか	Resilient students	0.0%	22.5%	11.0%	7.4%	48.8%	1.7%	2.6%	5.9%
	Non-resilient students	0.2%	37.7%	13.4%	7.2%	32.8%	0.7%	1.6%	6.3%
	A層(Upper middle以上)	0.0%	1.5%	1.6%	2.9%	83.7%	6.1%	1.5%	2.5%
	合計	0.1%	22.2%	8.5%	5.5%	54.4%	2.9%	1.6%	4.8%

図表 7-10 子供のレジリエンス×進学期待 (中学校)

		中学校まで	高等学校・高等専修学校まで	専門学校まで	短期大学・高等専門学校まで	大学まで	大学院まで	その他	分からない
あなたは、お子さんにどの段階の学校まで進んでほしいと思いますか	Resilient students	0.0%	16.9%	6.8%	7.3%	62.7%	1.1%	1.8%	3.4%
	Non-resilient students	0.2%	46.5%	14.4%	6.9%	26.7%	0.3%	1.4%	3.5%
	A層(Upper middle以上)	0.0%	1.6%	1.6%	2.4%	86.2%	5.1%	1.3%	1.7%
	合計	0.1%	27.2%	8.9%	5.2%	52.2%	2.2%	1.4%	2.8%

5 習い事の有無

保護者質問紙調査データからは、学習塾やそれに相当する学校外教育サービスの利用状況については、Resilient studentsとNon-resilient studentsに顕著な差は見られなかった。利用した時期を捨象し、塾等の利用率を「習っていない」の割合から算出²⁾すると、Resilient studentsで36.6% (小学校) と62.6% (中学校) , Non-resilient studentsでは38.4% (小学校) と60.4% (中学校) で、ほとんど同様の結果であった。差はないものの、Lowestに区分されるグループでも中学校段階では6割程度の生徒が塾を利用してい

る点は興味深く、高校入試が家計に負担を強いるものになっていることを窺わせる結果である（図表は省略）。

また、当然ながら、ゆとりある高学力層は塾を積極的に利用している。Upper middle以上の「学力A層」の利用率は小学校で65.6%，この値は中学校段階のLowestの利用率を上回る水準にある。中学校になると8割を越える生徒（80.7%）が塾等に通っており、これらの高い学力水準が学校外の教育サービスによって支えられている様子が分かる。

通塾等の学校外教育サービスについて、児童生徒質問紙では単に利用の有無だけでなく、どのようなタイプのサービスかについても尋ねている（図表7-11・7-12）。

図表7-11 子供のレジリエンス×塾等の利用状況（小中学校・児童生徒質問紙）

		学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している	学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している	両方の内容を勉強している	両方の内容のどちらともいえない
学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか(小学校)	Resilient students	67.7%	17.4%	1.8%	7.8%
	Non-resilient students	65.3%	12.5%	8.6%	6.1%
	A層(Upper middle以上)	40.3%	43.8%	1.2%	10.1%
	合計	55.4%	25.4%	5.2%	7.8%
学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか(中学校)	Resilient students	50.9%	19.4%	2.6%	24.7%
	Non-resilient students	54.0%	11.6%	9.9%	19.6%
	A層(Upper middle以上)	27.6%	35.5%	2.3%	31.8%
	合計	43.6%	21.4%	6.5%	24.6%

図表7-12 子供のレジリエンス×塾等の利用状況（小中学校・児童生徒質問紙）[通塾者のみ]

		学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している	学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している	両方の内容を勉強している	両方の内容のどちらともいえない
学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか(小学校)	Resilient students	53.8%	5.5%	24.2%	16.4%
	Non-resilient students	36.3%	25.0%	17.7%	22.0%
	A層(Upper middle以上)	73.3%	2.0%	16.9%	7.7%
	合計	57.0%	11.7%	17.5%	14.0%
学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか(中学校)	Resilient students	39.5%	5.2%	50.3%	5.1%
	Non-resilient students	25.2%	21.6%	42.6%	10.5%
	A層(Upper middle以上)	49.1%	3.2%	43.9%	3.8%
	合計	37.9%	11.6%	43.7%	6.9%

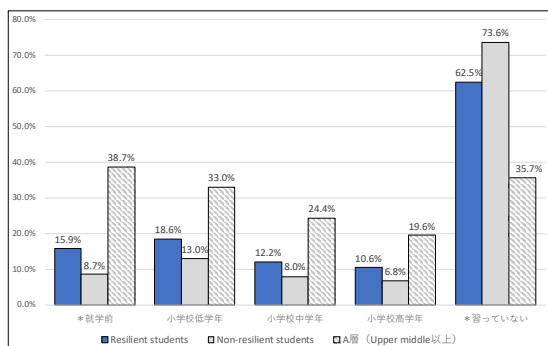
通塾に関する保護者の回答と齟齬はあるものの、児童生徒質問紙から把握できる通塾率についてはこれまで確認してきた点とおおむね同様の傾向がみられる。

塾でどのような内容を学んでいるかについては、Upper middle以上の「学力A層」では小学校の通塾者の7割以上、中学校の通塾者の約半数が「学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している」と回答している。Resilient studentsとNon-resilient studentsの通塾者の多くも「学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している」を選択しているが、Non-resilient studentsは「学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している」、Resilient studentsは「両方の内容を勉強している」と答える児童生徒が一定数おり、中学校のResilient studentsでは「両方の内容を勉強している」と答える者が最も多い結果になっている。後述するように、塾で学ぶ内容にみられるこうした特徴は、授業の復習を重視するResilient studentsの学習スタイルと符合する興味深い結果である。

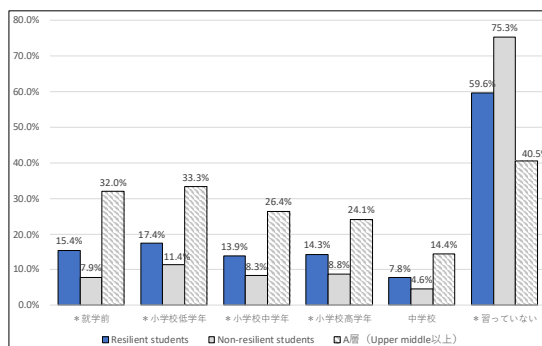
これらの点を確認したうえで、以下では小学校と中学校の双方で、Resilient studentsとNon-resilient studentsに一定の差が見られた項目を示したい。次頁に示す図表7-13・7-14は芸術文化活動の習い事、図表7-15・7-16は英語に関する習い事を小中

別に整理したものである（利用時期は複数回答のため、各項目の回答を合算すると100%を越える）。

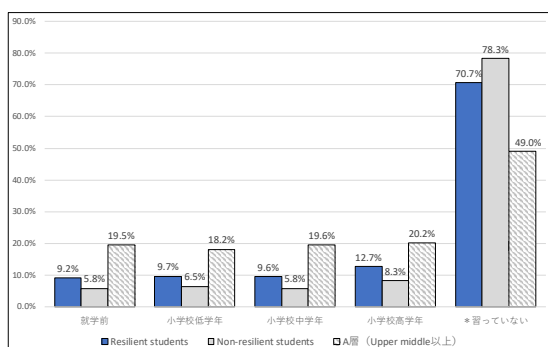
図表 7-13 レジリエンス×芸術文化活動（小）



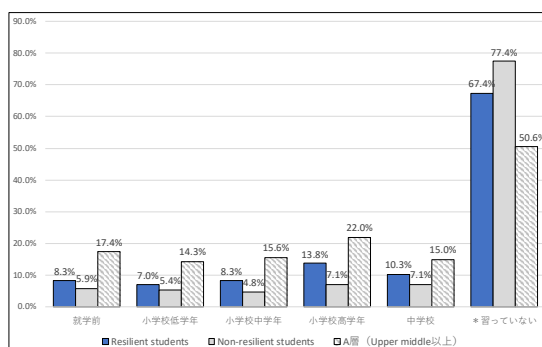
図表 7-14 レジリエンス×芸術文化活動（中）



図表 7-15 レジリエンス×英語関連活動（小）



図表 7-16 レジリエンス×英語関連活動（中）



*のついた項目はResilient studentsとNon-resilient studentsで5%ポイント以上の差があるもの

通塾等と同様、Upper middle以上の「A層」との違いが顕著だが、Resilient studentsはNon-resilient studentsを比べると、前者は后者よりも習い事を利用する割合が高い傾向にある（「習っていない」と回答する割合が少ない）。

また、教科の学習との関連が強い英語の習い事と比較すると、芸術文化に関わる活動（具体例はピアノ・舞踊・絵画等）は就学前から利用している者がResilient studentsのほうが小中ともに多く、より早い時期から非言語的な諸活動を積極的に行うことがレジリエンスの発揮と関連している。この結果は、後に触れる子供たちの「非認知スキル」の観点から見ても興味深い。

6 学校への関わり

今回のデータでは、地域の活動や学校と地域との連携・協働に関わる活動への関与については、Resilient studentsとNon-resilient studentsの保護者で大きな違いはみられなかった。他方で学校の教育活動への関与については、Resilient studentsの保護者により積極的な姿勢が認められた。小学校ではPTAや保護者会への参加、中学ではこれに加えて学校行事への参加を「よくする」と回答する傾向が特徴的である。学校外教育サービスの利用に経済的な制約があるために、学校との関係を密にとろうとしているのかもしれない

い（図表 7-17・図表 7-18：次頁）。

図表 7-17 子供のレジリエンス×学校との関わり（小学校）

		よくする	時々する	あまりしない	まったくしない
PTA活動や保護者会などへの参加	Resilient students	37.6%	38.5%	18.1%	5.8%
	Non-resilient students	31.8%	36.2%	23.4%	8.7%
	A層(Upper middle以上)	49.9%	35.7%	12.2%	2.2%
	合計	39.4%	36.1%	18.6%	5.9%

図表 7-18 子供のレジリエンス×学校との関わり（中学校）

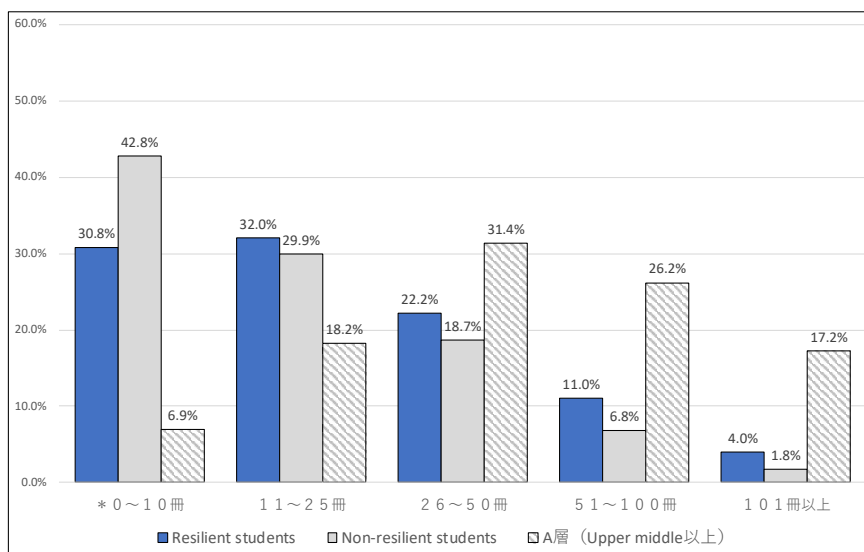
		よくする	時々する	あまりしない	まったくしない
授業参観や運動会などの学校行事への参加	Resilient students	53.5%	33.2%	10.4%	2.9%
	Non-resilient students	44.9%	36.4%	15.2%	3.5%
	A層(Upper middle以上)	63.7%	28.5%	6.7%	1.0%
	合計	52.8%	33.2%	11.6%	2.5%
PTA活動や保護者会などへの参加	Resilient students	27.9%	38.8%	23.2%	10.1%
	Non-resilient students	21.3%	33.6%	30.6%	14.5%
	A層(Upper middle以上)	37.2%	40.1%	18.6%	4.1%
	合計	27.9%	36.4%	25.5%	10.2%

7 蔵書数

図表 7-19・図表 7-20（次頁）は、自宅にある蔵書数（子供向けの本）を比較したものである。子供向けの本を除外した蔵書数についても同様の傾向が認められたため、こちらについては図表を省略する。

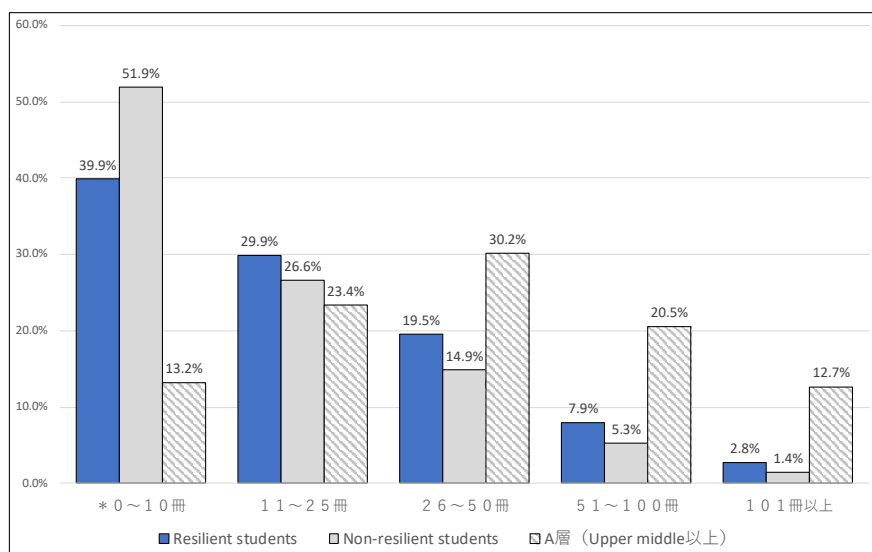
SESがLowestに区分されるグループは、どちらも「0～10冊」が最頻値で分布の形も似ており、Upper middle以上の「学力A層」の回答傾向とかなりの違いがある。しかしながら、Resilient studentsの家庭では「0～10冊」と回答する割合がNon-resilient studentsよりも顕著に低く、「11～25冊」から「101冊」までの他の項目ではあてはまると回答する割合が高くなっている。こうした結果からは、リソースに制約があるなかで、なるべく多くの本を保持しようとする姿勢がResilient studentsの家庭にあることが窺える。

図表 7-19 子供のレジリエンス×子供向けの本・蔵書数（小学校）



*のついた項目はResilient studentsとNon-resilient studentsで5%ポイント以上の差があるもの

図表 7-20 子供のレジリエンス×子供向けの本・蔵書数（中学校）



8 保護者の最終学歴

Q18（蔵書数と保護者の収入・属性）の蔵書以外の設問で、小学校・中学校の両方で Resilient students と Non-resilient students の間に違いがみられた項目は、母親（またはそれに代わる方）が従事する職業と、保護者の最終学歴であった。

Resilient students の母親は、Non-resilient students と比較すると「事務的な仕事」に従事する者の割合が小学校で 26.5% [Resilient]・20.1% [Non-resilient：以下同様]、中学校で 27.4%・19.5% と高く、中学校では「サービスの仕事」に従事する割合が低い（23.7%・29.6%）が、その他の職業については大きな違いはみられなかった（図表は省略）。

保護者の最終学歴の違いをまとめたものが、図表 7-21・図表 7-22 である。

図表 7-21 子供のレジリエンス×保護者の最終学歴（小学校）

		小学校・中学校	高等学校・高等専 修学校	短期大学・高等専 門学校・専門学校	大学	大学院
父親(または父親に代わる方)の最終学歴	Resilient students	15.9%	76.2%	7.2%	0.7%	0.0%
	Non-resilient students	23.7%	69.8%	6.0%	0.6%	0.0%
	A層 (Upper middle以上)	0.1%	8.8%	12.1%	65.9%	13.2%
	合計	12.6%	42.7%	8.8%	29.9%	5.9%
母親(または母親に代わる方)の最終学歴	Resilient students	8.7%	83.7%	7.4%	0.2%	0.0%
	Non-resilient students	16.4%	77.0%	6.6%	0.1%	0.0%
	A層 (Upper middle以上)	0.0%	8.3%	45.7%	42.9%	3.0%
	合計	9.2%	49.5%	22.6%	17.5%	1.2%

図表 7-22 子供のレジリエンス×保護者の最終学歴（中学校）

		小学校・中学校	高等学校・高等専 修学校	短期大学・高等専 門学校・専門学校	大学	大学院
父親(または父親に代わる方)の最終学歴	Resilient students	16.6%	80.1%	2.5%	0.8%	0.0%
	Non-resilient students	23.4%	73.4%	2.7%	0.5%	0.0%
	A層 (Upper middle以上)	0.1%	13.0%	14.0%	63.5%	9.5%
	合計	12.6%	46.6%	7.8%	28.8%	4.3%
母親(または母親に代わる方)の最終学歴	Resilient students	7.7%	89.6%	2.7%	0.1%	0.0%
	Non-resilient students	14.6%	82.6%	2.8%	0.0%	0.0%
	A層 (Upper middle以上)	0.0%	12.0%	52.4%	33.8%	1.7%
	合計	8.4%	55.0%	22.5%	13.4%	0.7%

Resilient studentsとNon-resilient studentsはLowest SESに区分されるため、Upper middle以上の層との違いのほうが大きい。具体的には、Upper middle以上は女性が短大・高専・専門学校卒、男性は大卒の比率が最も高いのに対し、Resilient/Non-resilient studentsは高校・高等専修学校卒業者が多数を占めている。

そのうえで、先に示した二つの図表をみてみると、Resilient studentsとNon-resilient studentsの間に少なからぬ違いがあることに気づく。両方とも高卒程度の学歴獲得者がマジョリティである点は共通するが、Non-resilient studentsは父母ともに「小学校・中学校」卒業者が多い点が特徴的である。

この結果は、Non-resilient studentsの保護者に義務教育のみの修了者、あるいは後期中等教育段階で中途退学した者が多いことを意味している。実際にそのような連関があるのかについてはさらなる検討を要するが、保護者の世代における中退問題への対応が、子供世代が学力面でレジリエンスを発揮するかどうかに影響を与えることを示唆する、興味深い結果である。

これまでの結果を振り返ると、Resilient studentsの保護者は、Non-resilient studentsの保護者と比べ、子供の好奇心を引き出したり、学習活動を促したりするような働きかけを積極的に行っていた。学校以外の習い事を利用する割合も多く、行事やPTA活動に参加する等、学校教育に対する親和的な姿勢を基盤にした「教育熱心さ」が特徴だと言えるだろう。

Upper middle以上の高学力層と比較すると「熱心さ」の度合いが相対的に弱く（ただし子供との会話の内容等、差が少ない項目もある）、子供の教育に割けるリソースにも制約があるものの、経済的・文化的な資源が相対的に少ない状況のなかで、比較的ゆとりのある層になるべく近い子育て環境を整える姿勢が不利な状況における学力形成を支えている。あくまでも単純な比較によるものであるが、保護者調査のデータからはこのような像が浮かび上がる。

（４）児童生徒質問紙調査データにみられる差異

この節では、児童生徒質問紙のデータをもとに、レジリエンスを発揮した子供にはどのような特徴がみられるのかを検討する。

1 子供の「非認知スキル」

図表7-23・図表7-24（次頁）は、第3章で検討した「非認知スキル」の算出に用いた質問項目群を比較したものである。

小学校では8項目すべて、中学校では5項目の設問で、Resilient studentsがNon-resilient studentsよりも「あてはまる」（「どちらかといえばあてはまる」）と回答する傾向が強く、Upper middle以上の学力A層との違いもそれほどない。学力と「非認知スキル」には弱い正の相関関係が認められ、「非認知スキル」とSESとの相関はほぼないという3章の結果とも整合的である。「非認知スキル」があるから学力が高いのか、その逆なのかは定かではない（おそらく相互に影響しあっているのではない）が、ものごと

を最後までやり遂げる姿勢や、異なる考えをもつ他者とコミュニケーションする能力は子供たちのレジリエンスと関連している。

図表 7-23 子供のレジリエンス×「非認知スキル」(小学校)

		あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない
ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある	Resilient students	77.9%	19.6%	2.3%	0.2%
	Non-resilient students	67.3%	25.2%	5.6%	1.8%
	A層(Upper middle以上)	82.9%	14.8%	1.7%	0.6%
	合計	74.3%	20.7%	3.9%	1.2%
難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している	Resilient students	26.3%	54.8%	17.4%	1.6%
	Non-resilient students	25.0%	47.6%	23.0%	4.4%
	A層(Upper middle以上)	30.6%	52.9%	15.1%	1.5%
	合計	27.3%	50.2%	19.5%	3.1%
自分には、よいところがあると思う	Resilient students	39.2%	42.5%	12.6%	5.7%
	Non-resilient students	33.0%	40.0%	17.2%	9.8%
	A層(Upper middle以上)	46.2%	38.4%	10.9%	4.5%
	合計	38.7%	39.5%	14.4%	7.4%
友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ	Resilient students	25.6%	33.6%	29.2%	11.6%
	Non-resilient students	15.6%	27.7%	36.0%	20.7%
	A層(Upper middle以上)	35.2%	32.5%	24.3%	8.0%
	合計	24.1%	30.0%	30.9%	15.0%
友達と話し合うとき、友達の話を最後まで聞くことができる	Resilient students	64.8%	32.5%	2.6%	0.0%
	Non-resilient students	56.7%	36.7%	5.5%	1.0%
	A層(Upper middle以上)	64.3%	31.6%	3.6%	0.4%
	合計	60.3%	34.4%	4.6%	0.7%
友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる	Resilient students	50.8%	40.1%	8.9%	0.2%
	Non-resilient students	36.2%	43.8%	16.8%	3.2%
	A層(Upper middle以上)	54.5%	38.8%	6.2%	0.5%
	合計	44.5%	41.5%	12.0%	1.9%
学級会などの話合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている *	Resilient students	17.6%	42.0%	29.6%	10.7%
	Non-resilient students	10.9%	32.5%	39.3%	17.3%
	A層(Upper middle以上)	20.9%	43.4%	28.2%	7.5%
	合計	15.3%	37.5%	34.2%	12.9%
学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある *	Resilient students	67.4%	23.4%	7.0%	2.2%
	Non-resilient students	56.3%	29.0%	10.7%	4.0%
	A層(Upper middle以上)	68.6%	23.1%	6.2%	2.1%
	合計	61.9%	26.3%	8.6%	3.1%

*は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の割合を示している

図表 7-24 子供のレジリエンス×「非認知スキル」(中学校)

		あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない
ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある	Resilient students	77.3%	19.1%	3.0%	0.5%
	Non-resilient students	69.6%	24.0%	5.0%	1.4%
	A層(Upper middle以上)	80.1%	16.7%	2.6%	0.7%
	合計	74.1%	20.9%	3.9%	1.1%
友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ	Resilient students	18.9%	36.5%	32.6%	11.9%
	Non-resilient students	14.4%	30.1%	36.6%	18.8%
	A層(Upper middle以上)	24.2%	36.5%	29.5%	9.8%
	合計	18.5%	33.0%	33.6%	14.9%
友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる	Resilient students	48.8%	43.2%	7.5%	0.6%
	Non-resilient students	38.3%	46.3%	13.6%	1.8%
	A層(Upper middle以上)	50.3%	42.7%	6.3%	0.7%
	合計	43.6%	44.7%	10.4%	1.3%
学級会などの話合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている *	Resilient students	12.7%	36.4%	35.9%	15.0%
	Non-resilient students	7.9%	26.3%	38.9%	26.9%
	A層(Upper middle以上)	14.6%	35.2%	35.6%	14.6%
	合計	10.8%	30.4%	37.5%	21.4%
学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある *	Resilient students	64.2%	25.3%	7.8%	2.7%
	Non-resilient students	58.6%	26.3%	9.7%	5.4%
	A層(Upper middle以上)	65.7%	23.3%	7.4%	3.6%
	合計	61.7%	25.1%	8.7%	4.6%

*は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の割合を示している

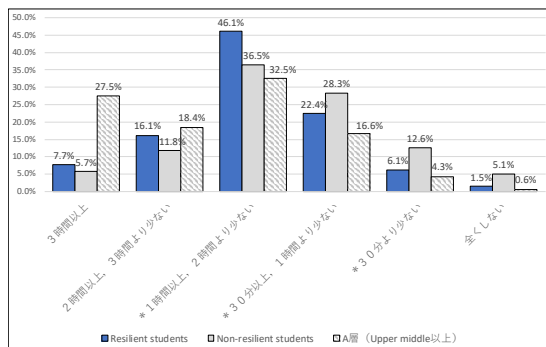
2 学習時間と読書時間

生活時間や放課後・土曜日の過ごし方を検討すると、小中学校の両方で、Resilient studentsはNon-resilient studentsよりも勉強や読書をして過ごす割合が高く、放課後や土曜日に「友達と遊んでいる」と答える割合が低い。例えば、土曜日の午前中から友達と遊ぶと回答する者は、小学校で32.1% [Resilient] ・44.0% [Non-resilient : 以下同様] , 中学校では21.3% ・29.8%である（午後ほどのカテゴリも「友達と遊ぶ」と回答する割合が高まり、小学校ではResilient ・ Non-resilientの差が無くなる）。また、中学校では、部活に参加していると回答する割合が高い点も特徴である。

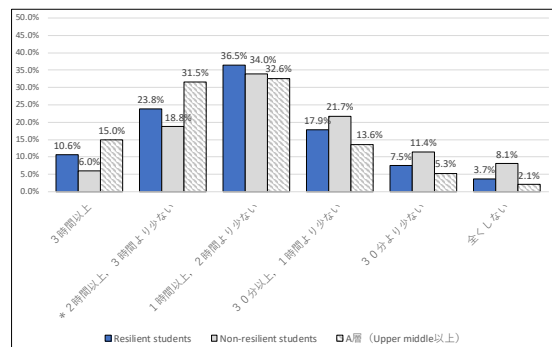
生活時間には（同時並行的に行うのではない限り）ある活動に従事するとその間は別なことができない特質があるので、読書や勉強に割く時間が長いResilient studentsは、友人と遊ぶ活動が少ないだけでなく、メディア視聴やゲームに割く時間についてもNon-resilient studentsよりも少ない傾向がある。なお、Upper middle以上の学力A層は、Resilient studentsよりもこれまで述べてきた傾向が顕著である（図表は省略）。

自由度の高い余暇的な活動に代わるものとして、次に示す図表7-25・図表7-26・図表7-27・図表7-28では、勉強や読書等学力形成との関連性が高い活動に割く時間（平日の時間）を比較してみた。

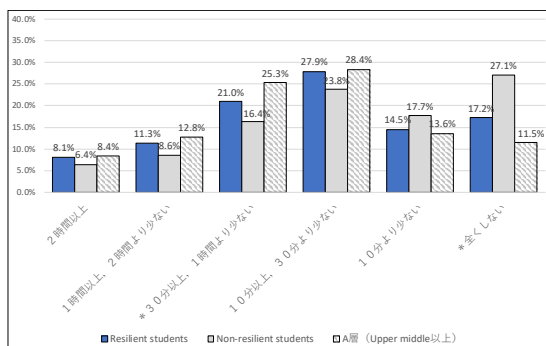
図表7-25 レジリエンス×平日学習時間（小）



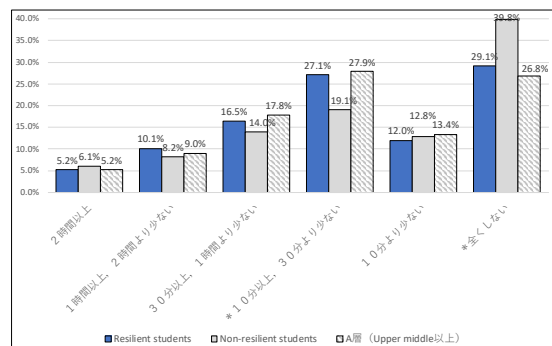
図表7-26 レジリエンス×平日学習時間（中）



図表7-27 レジリエンス×平日読書時間（小）



図表7-28 レジリエンス×平日読書時間（中）



平日の学習時間は小学校ではResilient studentsに区分される児童のうち「1時間以上、2時間より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答する者の割合がNon-resilient studentsよりも5%ポイント以上高く、中学校では「2時間以上、3時間より

少ない」を選ぶ割合で同様の違いがみられる。塾等の学校外教育サービスの利用時間も含まれているため、Upper middle以上の学力A層とResilient/ Non-resilient studentsの違いが際立っている。別な言い方をすれば、Resilient studentsは塾等に過度に頼らなくとも一定の学習時間を確保しており、そのことがかれらの学力獲得に結びついているということになる。

読書時間は小中ともResilient studentsで「全くしない」を選択する割合がNon-resilient studentsよりも低く、小学校では「30分以上、1時間より少ない」、中学では「10分以上、30分より少ない」を選ぶ割合が高いという結果になった。

学習時間と比べると、読書時間についてはResilient studentsとUpper middle以上の学力A層の違いは少なく、図書館等から無料で借りることができる活字メディアは、SESが相対的に低い保護者の子供たちが学力を獲得する際の代替的な資源となっていることが分かる（図表は省略するが、学校・地域の図書館利用頻度についても同様の結果が得られている。Resilient studentsとUpper middle以上の学力A層でほとんど差がなく、小学校で4～5割、中学校では2割程度の児童生徒が「月に1～3回程度」「週に1～3回程度」「だいたい週に4回以上」行くと答えている）。

3 学習スタイルにみられる違い

図表7-29・図表7-30（次頁）は、学習の方法に関する設問を比較したものである。

図表7-29 子供のレジリエンス×学習スタイル（小学校）

		している	どちらかといえば、している	あまりしていない	全くしていない
自分で計画を立てて勉強している	Resilient students	36.9%	33.2%	24.3%	5.7%
	Non-resilient students	24.5%	31.0%	31.2%	13.3%
	A層(Upper middle以上)	41.3%	36.2%	18.5%	4.1%
	合計	32.0%	33.2%	25.6%	9.1%
学校の宿題をしている	Resilient students	94.2%	4.7%	0.6%	0.4%
	Non-resilient students	82.3%	12.6%	3.9%	1.2%
	A層(Upper middle以上)	94.3%	4.2%	1.0%	0.4%
	合計	87.9%	8.7%	2.6%	0.8%
学校の授業の予習をしている	Resilient students	17.4%	26.5%	37.2%	18.8%
	Non-resilient students	12.8%	23.5%	39.6%	24.1%
	A層(Upper middle以上)	22.4%	24.7%	32.0%	20.8%
	合計	16.9%	24.2%	36.4%	22.5%
学校の授業の復習をしている	Resilient students	35.1%	30.9%	24.2%	9.8%
	Non-resilient students	19.6%	29.8%	32.0%	18.6%
	A層(Upper middle以上)	29.1%	30.4%	25.2%	15.3%
	合計	24.4%	30.1%	28.8%	16.7%

小学校ではすべての項目、中学校では3項目でResilient studentsはNon-resilient studentsよりも学習に関わる行動を行う傾向が強い。Upper middle以上の学力A層との違いも少なく「学校の授業の復習」を「している」と回答する割合は、Resilient studentsのほうがむしろ高い。授業の復習を重視する学習スタイルは、経済的な制約で塾等の学校外教育サービスの利用が制限されているResilient studentsに特徴的なものだといつて良いだろう。学校で習う内容の着実な定着をはかる取り組みが、かれらの高い学力水準の支えとなっていると解釈できる。

図表 7-30 子供のレジリエンス×学習スタイル（中学校）

		している	どちらかといえ ば、している	あまりしていない	全くしていない
自分で計画を立てて勉強している	Resilient students	24.2%	33.8%	28.8%	13.2%
	Non-resilient students	14.5%	29.2%	37.6%	18.7%
	A層(Upper middle以上)	26.8%	34.4%	28.2%	10.6%
	合計	19.9%	31.5%	33.4%	15.2%
学校の宿題をしている	Resilient students	81.0%	12.2%	5.1%	1.7%
	Non-resilient students	61.1%	24.7%	10.0%	4.2%
	A層(Upper middle以上)	78.2%	15.5%	4.6%	1.7%
	合計	68.9%	20.4%	7.6%	3.1%
学校の授業の復習をしている	Resilient students	30.6%	31.8%	23.8%	13.7%
	Non-resilient students	15.3%	29.7%	32.6%	22.4%
	A層(Upper middle以上)	25.8%	32.0%	27.0%	15.2%
	合計	20.3%	30.7%	29.9%	19.1%

この点と関わって興味深い結果は、放課後や土曜日の過ごし方を尋ねる際に、「家でテレビやビデオ・DVDを見たり、ゲームをしたり、インターネットをしたりしている」という項目を選択する割合は、Resilient studentsのほうがUpper middle以上の学力A層よりも高いことである。メディア視聴時間やゲームの時間はNon-resilient studentsのほうが長い傾向がある（いわゆるヘビーユーザーが多い）が、自由な時間を過ごす際にこれらの映像メディア／パーソナルメディアへの接触を選択する割合はResilient studentsも高く、とりわけ土曜日の午後にこのような過ごし方を選ぶ割合は、Resilient studentsがもっとも高い。具体的には、小学校で78.6% [Resilient] ・ 73.1% [Non-resilient] , 63.0% [Upper middle以上の学力A層：以下同様] , 中学校では78.7% ・ 71.2% ・ 70.5% という結果が得られている。全体的にどのカテゴリでも行為率が高く、Upper middle以上の学力A層はこの時間帯に通塾している者も多いため、ある意味では当然の結果ともいえるが、Resilient studentsにとって、活字メディアと同様に、これらの映像メディア／パーソナルメディアも、知的な好奇心を満たし、学力の獲得に資する代替的な資源として機能している可能性を指摘しておきたい。

これまで検討した児童生徒質問紙から窺えるResilient studentsの特徴をまとめると、①「非認知スキル」の高さ、②学力獲得に結びつく活動（勉強や読書等）を優先する生活スタイル、③復習中心の学習スタイル、④自由時間における映像メディア／パーソナルメディアへの接触と過度な利用を統制する姿勢の4点に整理できる。前半部分で検討した、保護者の関わりや家庭で利用可能な資源のあり方は、Resilient studentsの性格・行動特性の形成に一定程度関連しているように思われるが、両者の関係についてのさらなる検討については他日を期したい。

<注>

1) PISAにおいては、学力水準において全サンプルの上位25%、社会経済的背景が各国基準で下位25%に位置する子どもがレジリエンスのあるケースと定義されている。

2)「学習塾（家庭教師や、学習習慣などを身に付けるための習い事を含む）について、いつ頃まで習っていましたか」との質問に対し、「就学前・小学校低学年・小学校中学年・小学校高学年・習っていない」の5つの選択肢から、あてはまる番号すべてに○を付けさせる形で調査。

（参考文献）

齊藤和貴・岡安孝弘, 2009, 「最近のレジリエンス研究の動向と課題」『明治大学心理社会学研究』第4号, pp.73-84.